

十全同窓会会報

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓会会報
編集委員会
印刷/ヨシダ印刷(株)

(題字：中村信一 十全同窓会会長)

平成二十九年年度

十全同窓会総会開催

平成二十九年度の十全同窓会総会が、去る七月一日(土)午前九時より、医学部記念館において、中村信一会長の開会の辞で開始された。続いて平成二十八年七月一日から二十九年六月三十日まで逝去された六十九名の物故会員(次頁一覽)に黙祷を捧げた後、議事に入った。

まず、大井章史理事長より平成二十八年度の会務報告が行われた。平成二十八年三月卒業生は百十九名であったこと、二十一支部の総会に会長・理事長・理事が出席したこと、現在会員総数(二四四五一)などが報告された。次に、多久和陽医学系長・医学類長から、医学類の現状、井関尚一教授の退職、泌尿器科溝上敦教授、生理学第二・三枝理博教授の新任が報告された。堀修大学院医薬保健学総合研究科長より、大学院管理・運営体制、大学院教育の現状の報告、また修士課程ではアフガニスタン国「未来への架け橋：中核人材育成プロジェクト (PEACE) フェーズ2」採択、受入大学登録、博士課程文科省プログラム

の「北陸認知症プロフェッショナル医養成プラン」、「メディカル・イノベーションコース」、多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)」養成プラン採択が報告された。他大学との交流として、ロシア連邦クラスノヤルスク医科大学との大学間国際交流協定、復旦大学上海医学院との部局間国際交流協定が報告された。中村裕之大学院先進予防医学研究科長より、「大学院先進予防医学研究科」の下に金沢大学・千葉大学・長崎大学の三大学により設置された「先進予防医学共同専攻(共同大学院)」の特色、カリキュラム、基本方針の説明がされた。報告に続き第十五回高安賞の贈呈が行われた。征矢晋吾氏(分子神経科学・統合生理学)に最優秀論文賞、諸葛芳氏(細胞代謝栄養学)、渡辺知志(細胞移植学)には優秀論文賞が授与された。

中村会長から参加された十四支部の代表が紹介された後、議事審議に移り大井理事長から平成二十八年度会計決算報

告、森紀喜監事より監査報告がされ承認された。また二十九年度事業計画及び予算(案)も説明の後承認された。

議案審議について、学生課外活動支援として、白山診療班、立山診療班、ACLS金沢、医学実行委員会に支援金が贈呈された。

総会後には教授就任記念講演が、革新ゲノム情報学 田嶋敦教授から「多面的オミックス解析に基づくヒト表現型多様性の成立基盤解明」、附属病院臨床開発部 村山敏典教授から「金沢/北陸発の臨床開発を目指して」先端医療開発センターとの連携のもとに、脳神経外科学 中田光俊教授から「脳科学に対する脳神経外科のアプローチ」、先進総合外科学 竹村博文教授から「冠動脈バイパスグラフトの機能的、組織学的アプ



ローチ」と題して行われ、参加者一同、若い先生方のパワフルで興味深い講演に魅了された。講演終了後、二階ラウンジにて懇親会が行われた。中村会長の挨拶、奈良支部長の西尾功先生のご発声による乾杯の後、各支部代表ご挨拶・近況報告をいただき、臨床医の若い先生方や学生も参加され和やかな進行のうち盛会裏に散会となった。

(大井 章史 記)

目次

平成二十九年度十全同窓会総会開催・就任挨拶	1
総会記事	3
教授就任講演	4
受賞	7
学会報告等	11
金沢大学関連病院長会議	12
御遺骨返還式・合同慰霊祭	14
十全学術行脚	14
病院紹介	15
教室だより	17
支部だより	19
クラス会	21
同窓生の消息	25
十全昔話	25
学生コーナー	26
オープンキャンパス	27
医学展	28
ホームカミングデイ	28
編集後記	30

物 故 会 員

(平成28年7月1日～平成29年6月30日の連絡)

長谷川 寛	昭和十八年専卒業	大島 浩太郎	昭和三十二年卒業
原田 孝	昭和十九年専卒業	小竹 要	昭和三十二年卒業
井上 博夫	昭和二十年卒業	小原 修	昭和三十二年卒業
市川 勝	昭和二十年専卒業	佐伯 一善	昭和三十三年卒業
粟井 正則	昭和二十二年卒業	深谷 桂一	昭和三十三年卒業
高田 幾男	昭和二十三年卒業	松田 保	昭和三十三年卒業
高田 外喜雄	昭和二十三年卒業	新谷 郁夫	昭和三十四年卒業
中原 健三	昭和二十三年卒業	池田 眞康	昭和三十四年卒業
津川 洋三	昭和二十四年卒業	太田 陽一	昭和三十四年卒業
西村 聖二	昭和二十四年卒業	岡田 良康	昭和三十四年卒業
綿谷 一郎	昭和二十四年卒業	安元 三郎	昭和三十四年卒業
毛利 昭	昭和二十四年専卒業	大和 建昭	昭和三十四年卒業
辻 光二	昭和二十五年卒業	宮澤 洋一	昭和三十六年卒業
古本 啓一	昭和二十五年卒業	福田 明史	昭和三十七年卒業
上原 利明	昭和二十五年専卒業	万丸 章三	昭和三十七年卒業
宇賀治 純	昭和二十五年専卒業	笹井 三郎	昭和三十九年卒業
小川 隆彦	昭和二十五年専卒業	小坂 哲志	昭和四十年卒業
織田 喜一	昭和二十五年専卒業	新野 正憲	昭和四十年卒業
瀬野 孝	昭和二十五年専卒業	大槻 典男	昭和四十二年卒業
武内 修	昭和二十五年専卒業	富岡 秀文	昭和四十二年卒業
山本 一郎	昭和二十五年専卒業	松田 保秀	昭和四十三年卒業
日月 芳雄	昭和二十六年卒業	中村 正夫	昭和四十四年卒業
米丸 年也	昭和二十六年卒業	木原 鴻洋	昭和四十六年卒業
泉 外美	昭和二十七年卒業	北野 哲男	昭和四十七年卒業
梅崎 伸	昭和二十七年卒業	吉田 均	昭和五十年卒業
鈴木 昭二	昭和二十七年卒業	西村 元一	昭和五十八年卒業
長林 勝彦	昭和二十七年卒業	本莊 茂	昭和六十二年卒業
今村 昭治	昭和二十八年卒業	黒住 明子	平成九年卒業
片桐 利美	昭和二十九年卒業	三輪 淳夫	昭和五十年大学院修了
中村 和夫	昭和二十九年卒業	河合 純一	II 会員
卜部 節代	昭和三十年卒業	作川 憲章	II 会員
尾崎 純弘	昭和三十年卒業	中川 彦人	II 会員
金田 修	昭和三十年卒業	中永 悠子	II 会員
興村 哲郎	昭和三十一年卒業	福田 鎮雄	II 会員
小林 一到	昭和三十一年卒業	永野 耐造	特別会員
森 省三	昭和三十一年卒業		

(敬称略)

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。会員のご不幸は当会にご一報をお願いいたします。

就任挨拶

滝野 隆久博士 (大学院平成六年修了)

金沢大学国際基幹教育院GS教育系教授に就任



この度、平成二十九年四月一日付けで、金沢大学国際基幹教育院GS教育系細胞・分子生物学担当教授を拝命いたしました。

私は平成二年に徳島大学歯学部を卒業後、金沢大学医学部歯科口腔外科（山本悦秀教授）に入局いたしました。平成三年に金沢大学大学院医学系研究科に入学し、清水元治教授が主宰されておりました金沢大学がん研究所ウイルス部でがん細胞浸潤における蛋白質分解酵素の役割に着目した研究を始めました。幸いにも、がん細胞浸潤の鍵となる分子として現在も注目されている細胞外マトリックス分解酵素、膜型マトリックスメタロプロテアーゼ (MT-MMP) の発見に携わることができ、平成七年に博士号を取得いたしました。日本学術振興会特別研究員（がん）を経て、平成九年から米国保健

衛生研究所（NIH）の歯頭蓋顎顔面研究所（NIDCR）Kenneth M. Yamada博士のもとに留学いたしました。Yamada博士は、細胞外マトリックスとインテグリン研究において世界的に有名な研究者であり、私は細胞外マトリックスによるインテグリンを介した細胞運動誘導シグナル伝達、特にFAK/p130Cas/Cdc42経路を中心に解析を行いました。平成十一年からは佐藤博教授が主宰されておりました金沢大学がん研究所ウイルス部（がん進展制御研究所細胞機能統御研究分野）に着任し、細胞外マトリックス分解による細胞運動誘導シグナル伝達の研究を行って参りました。

現在は、全学生対象のGS科目細胞・分子生物学を「癌」を題材として講義し、学生に「癌」に対する理解を少しでも深めてもらいたいと考えております。研究面では、がん進展制御研究所の温かいご支援のもとで、がん細胞浸潤の分子メカニズムの解明に今後も取り組んで参りたいと思います。

最後になりますが、金沢大学医学部十全同窓会の皆様におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

佐藤 修平博士 (平成二年卒業)

川崎医療福祉大学医療情報学科教授に就任



十全同窓会の先生方におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。このたび平成二十九年四月一日付けで川崎医療福祉大学医療情報学科の教授を拝命いたしました。

私は平成二年に金沢大学医学部医学科を卒業後、岡山大学放射線科（平木祥夫教授）に入局し、放射線科医としてのスタートを切りました。放射線医学を志した理由としては、当時の金沢大学放射線科の高島力教授、核医学科の久田欣一教授というご高名な先生方の教えを直接いただいたことが大きかったと思います。

岡山大学では、核医学を専門とされていた平木教授に直接ご指導をいただき、この領域に興味を持ちました。また、研修医時代には小児科の先生方と一緒に先

天性心疾患を勉強する機会にも恵まれました。

以来、核医学と循環器画像診断を専門として臨床、研究を行ってまいりました。この間、核医学領域に関しては、新しいトレーサが次々と開発され、それらを用いて臨床研究を行うことができました。ベータ線を用いた悪性リンパ腫の治療やアルファ線を用いた前立腺癌骨転移の治療にも関わることができました。また循環器領域に関しては、先天性心疾患におけるCTおよびMRIの研究を行ってききました。そのおかげで小児循環器科や心臓血管外科の先生方には懇意にしていただき、特に世界初の心臓内幹細胞移植療法の臨床研究に関わることができたことは、大きな財産となりました。

これまでの私の仕事は診療放射線技師の協力なくしてはなし得なかった仕事ばかりであり、今後は川崎医療福祉大学でよい診療放射線技師を育てることで恩返しをしたいと考えています。最後になりましたが、私をここまで育てていただいた金沢大学医学部および十全同窓会に改めて感謝致します。今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

太田 嗣人博士（平成九年卒業）

旭川医科大学内科学講座 病態代謝内科学分野教授に就任



平成二十九年九月一日付で、旭川医科大学内科学講座 病態代謝内科学分野（第二内科）の教授を拝命いたしました。私は、平成九年に本学を卒業し、故・小林健一教授が主催されていた旧第一内科に入局しました。これまで、金子周一教授、篁俊成教授のご指導の下、糖尿病、及び合併症に関する研究、臨床に従事して参りました。

糖尿病腎症の抑止に関する研究により学位を取得後、糖尿病の病態を肝臓という視点から捉える研究へと展開しました。インスリン抵抗性は脂肪性肝炎（NAFLD）の成因の中心にあることをいち早く証明し、また、本学の誇るヒト肝臓遺伝子情報の構築に貢献して参りました。その後、コロンビア大学に留学し、小胞体ストレスがリポ蛋白代謝を大きく変化させ、脂質異常症や脂肪肝の発症に

関わることを明らかにしました。

帰国した平成二十年から、全国に先駆け導入されたテニユアトラック制度の教員に採用され、独立した研究室を運営し、炎症や免疫応答という観点から代謝研究を継続してきました。中村信一前学長はじめ、前理事の山本博先生、田中隆治先生（星薬大学長）らのご支援の下、肥満症・糖尿病・脂肪肝への微量栄養素の有効性に関する橋渡し研究も推進してきました。

私は金沢に生まれ育ち、三年間の米国留学以外、内科医として二十年、金沢大学旧第一内科と北陸の関連病院で研鑽を積んで参りました。旭川医科大学は、広大な北海道の地域医療に貢献するため、昭和四十八年に新設された国立医科大学です。この度、道北・道東、北海道の医療を支える内科学教室の教授職に任ぜられました。その重責を果たすべく、本学で学んだことを忘れず、なぜ自分が旭川医大に求められたかを考え、臨床・教育・研究に全力で取り組んでいく所存です。百五十年の歴史を誇る十全同窓会の先生方におかれましては、これまで以上にご指導、ご鞭撻を賜ることと存じます。今後とも、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

総会記事

平成二十八年年度決算報告ならびに 平成二十九年年度予算について

平成二十八年年度決算

表1に一般会計の決算書を示します。会費収入は大幅に減少し、見込み額に達しませんでした。創立百五十周年記念誌編集委員会より、収支決算後の残金の繰り入れがありました。支出では、会員情報管理システム化にかかる費用を基金から繰り入れて充てました。各支部総会への参加、ならびに各支部から本学総会への参加が増加しており、旅費も増額となっています。補助費は記念館整備が必要とされなかった分、減額となりました。

全体としては会費収入の激減で、基金からの繰り入れ額が増額しました。付随する特別会計（表2-5参照）では、十全同窓会基金会計収入は資産運用で得た利息のみです。また、一般会計への繰り入れ額は三百万円でした。名簿作成会計では名簿作成費を支出、免除会員の先生方からの補助、広告料が収入となっています。また高柳奨学金は、奨学生一名の採用がありました（表2-5参照）。

平成二十九年年度予算

会費収入は努力目標を計上しました。ここ数年間、会費納入率は五〇％に満たない状態が持続しており、目標達成のためさらなる努力が必要とされています。特に、新入会員の会費納入率低下が著しく、長期低落傾向を示しています（図）。学類在籍中から働きかけることにより新入会員の会費納入率を増加させることが、今後最大の課題であると考えています。支出は「宝町キャンパス竣工特

集号」を含む事業費が二百五十万円程度増額し、学生課外活動や図書館などの課外活動・整備補助、事務費は例年通りの予算を計上しました。特別事業予算は基金からの繰り込みとしました。

会費納入率



図 過去五年間の会費納入率と入会率の推移。

会計監査報告書

平成二十九年年度 旭川医科大学 十全同窓会 一般会計
旭川医科大学 十全同窓会 基金会計
十全同窓会 基金 名簿作成会計
高柳奨学金会計

上記会計科目の収入および支出に關し、帳簿および記録書類に照合し、
帳簿記載の通りであることを確認した。

平成二十九年九月 日

監査人 中村 信一 監査
監査人 森 紀彦 監査
監査人 高柳 英博 監査

（会計担当 谷内江 昭宏 記）

(表1) 平成28年度決算書

自 平成28年 1月 1日
至 平成28年12月31日

取 入				支 出			
科 目	予算 (円)	決算 (円)	摘 要	科 目	予算 (円)	決算 (円)	摘 要
前年度繰越金	1,780,608	1,780,608		事 業 費	8,200,892	7,565,388	会報印刷製本代 2,648,160 会報・アカンサス発送代・理事会関係発送 1,609,901 発送用封筒代・会費払い込み用紙 322,380 会報発送封入作業 年3回 140,955 アカンサス印刷代 44,100 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 卒前研修支援 (SP 研修会支援) 50,000 学生課外活動支援 (立山診療班) 100,000 (白山診療班) 100,000 新入会員卒業祝 (印鑑付ペン) 269,892 @ 2,268 × 119 本 会員情報管理システム作成 2,080,000 ホームページ会員情報サイト管理 0
会 費 収 入	12,292,000	9,893,000	平成 27 年度会費 4,000 円 × 1235 人 4,940,000 過年度分 411 人 4,344,000 平成 27 年度以降 16 人 64,000 準会員会費 6,000 円 × 90 人 540,000 5,000 円 × 1 人 5,000	旅 費	1,400,000	1,533,760	各支部総会出張旅費、各支部長総会招待旅費 1,533,760 会報取材旅費等
雑 収 入	0	822,716	創立 150 周年記念誌編纂委員会より	会 議 費	480,000	443,710	総会、理事会、会報編集委員会、反省会、 443,710 合同懇親会
基金からの繰入	2,500,000	3,000,000		慶 弔 費	100,000	36,085	弔電・生花 36,085
				補 助 費	570,000	470,000	記念館展示室整備 0 図書館医学部分館整備補助 300,000 学生課外活動補助 (ACLS) 100,000 医学展補助 50,000 Live Aid Kanazawa 0 大学院進学説明会補助金 20,000
				事 務 費	3,450,000	3,467,398	会費払込料金、コンピューター購入、感光体・トナー、 1,117,398 通信費、証明消発行手数料、文具、搬送手数料 事務職員超勤、プリンター修理等一式 人件費 2,350,000
				雑 費		0	
				支部への補助費	600,000	590,000	15 件 590,000
				基金への繰込み	0	0	0
				予 備 費	1,771,716	409,251	[金沢大学創立 150 周年記念事業委員会]印鑑・ 409,251 アルバイト代[反省会補助等]
計	¥16,572,608	¥15,496,324		計	¥16,572,608	¥15,496,324	

(表2) 十全同窓会基金会計報告書

自 平成28年 1月 1日
至 平成28年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
前年度繰越金	53,888,806			3,000,000	一般会計へ繰り入れ
繰 入 金	0				
利 息	110,092	利付国債 (第118回・第336回)			
計	¥53,998,898		計	¥3,000,000	残高 ¥50,998,898

(表3) 十全同窓会会員名簿作成会計報告書

自 平成28年 1月 1日
至 平成28年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
繰 越 金	1,887,326		事 務 費	192,336	払込手数料、訂正シール
協 賛 金	110,000	免除会員協賛@5,000×22件	通 信 費	217,937	郵便料、名簿発送料
広 告 料	3,503,520		名 簿 作 成 費	4,646,160	
計	¥5,500,846		計	¥5,056,433	残高 ¥444,413

(表4) 高柳奨学会計報告書

自 平成28年 1月 1日
至 平成28年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
前年度繰越金	5,440,009		奨 学 金	225,000	H28年度高柳奨学金 1 名 (H28.4 ~ H28.12)
利 息	637	定期預金利息			
計	¥5,440,646		計	¥225,000	残高 ¥5,215,646

(表5) 平成29年度予算書

自 平成29年 1月 1日
至 平成29年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
前年度繰越金	980,732		事 業 費	8,193,080	会報印刷製本代 (会報 165・166・167・特集号) 4,350,000 会報・アカンサス発送代・理事会関係発送 1,850,000 発送用封筒代・会費払い込み用紙 350,000 会報発送封入作業 年 3 回 180,000 アカンサス印刷代 50,000 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 卒前研修支援 (SP 研修会支援) 50,000 学生課外活動支援 (立山診療班) 100,000 (白山診療班) 100,000 新入会員卒業祝 (印鑑付ペン) 263,080 @ 2,268 × 116 本 会員情報管理システム ログイン情報通知諸経費 700,000
会 費 取 入	10,525,000	平成 29 年度会費 4,000 円× 1500 人 6,000,000 過年度分 3,500,000 平成 29 年度以降 400,000 準会員会費 6,000 円× 100 人 600,000 5,000 円× 5 人 25,000	旅 費	1,500,000	各支部総会出張旅費、各支部長総会招待旅費 会報取材旅費等 1,500,000
基金より繰入	4,000,000		会 議 費	480,000	総会、理事会、会報編集委員会、反省会 480,000
			慶 弔 費	100,000	弔電・生花 100,000
			補 助 費	670,000	図書館医学部分館整備補助 200,000 学生課外活動補助 (西医体) 200,000 学生課外活動補助 (ACLS) 200,000 医学展補助 50,000 大学院進学説明会補助金 20,000
			事 務 費	3,500,000	会費払込料金、証明書発行手数料、振込手数料、通信費、 事務職員超過勤務、OA 機器関係、文具等 1,000,000 人件費 2,500,000
			支部への補助費	600,000	600,000
			基金への繰込み	0	
			予 備 費	462,652	
計	¥15,505,732		計	¥15,505,732	

(表6) 平成29年度 十全同窓会基金会計(案)

自 平成29年 1月 1日
至 平成29年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
前年度繰越金	50,998,898			4,000,000	一般会計へ繰り入れ
利 息	175,000	利付国債 (第 118 回・第 336 回)			
計	¥51,173,898		計	¥4,000,000	残高 ¥47,173,898

(表7) 平成29年度 十全同窓会名簿作成会計(案)

自 平成29年 1月 1日
至 平成29年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
繰 越 金	444,413				
計	¥444,413		計	¥0	残高 ¥444,413

(表8) 平成29年度 高柳奨学会計(案)

自 平成29年 1月 1日
至 平成29年12月31日

取 入			支 出		
科 目	金 額 (円)	摘 要	科 目	金 額 (円)	摘 要
前年度繰越金	5,215,646		奨 学 金	300,000	平成 28 年度奨学生 1 名 ¥25,000 × 3 ヲ月 (1 月 - 3 月)
利 息	599	定期預金利息			平成 28 年度奨学生 1 名 ¥25,000 × 9 ヲ月 (4 月 - 12 月)
計	¥5,216,245		計	¥300,000	残高 ¥4,916,245

教授就任講演

多面的オミックス解析に基づく ヒト表現型多様性の成立基盤解明

革新ゲノム情報学 田嶋 敦

生命機能は、一般に、内因（共通の生命過程と個人の生物学的特性）と外因（社会基盤を含めた環境や生活習慣）との相互作用により規定され、その結びが顕在した状態を「病気」と捉えることができます。単一遺伝子疾患とよばれる遺伝性疾患においても、疾患の原因となる遺伝子型と疾患発現との関係は単純ではなく、例えば、不完全浸透（incomplete penetrance）や表現度の多様性（variable expressivity）の存在が知られています。このように、表現型の発現には種々の要因が関与すると考えられており、その発現機構の総体を理解するためには、関与する要因の同定とそれら要因間の複雑な相互作用の解明が必要となります。

私はこの十年あまりゲノム医学領域を研究分野とし、多因子疾患や単一遺伝子疾患など、遺伝要因の関与が推定される疾患の病因、病態解明に取り組んできました。加えて、疾患の背景因子となり得る様々な生理的測定値（量的表現型）の個人差に関わる遺伝要因の探索も進めてきました。講演では、これまでに携わってきた種々の研究の中から、男性不妊症

や男性生殖関連形質を対象とした事例を紹介いたしました。この種のゲノム研究は、ヒトゲノムの多様性（個人差・集団間差）と疾患・形質との関連に関する統計遺伝学的分析を主体とし、各種表現型の発現に関わる新たな内因（感受性多型・遺伝子）の同定を可能とします。ゲノム解析に基づく感受性多型・遺伝子の

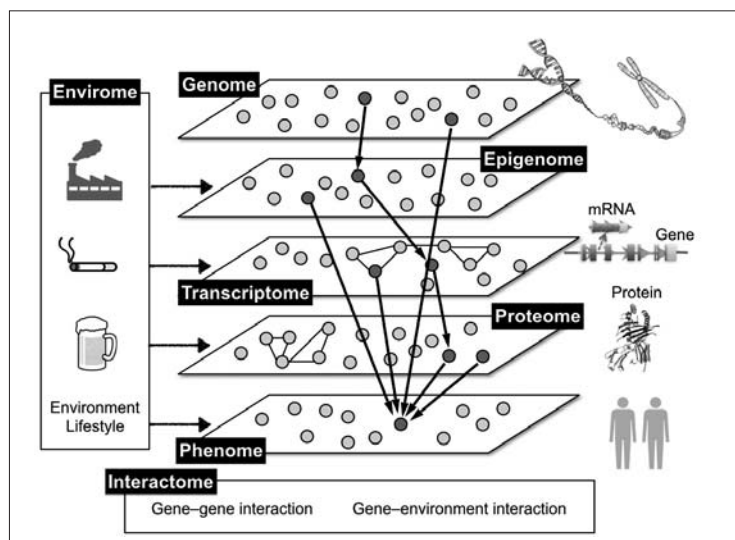


図1 多面的オミックス解析

同定研究以外にも、種々のがんや他の多因子疾患を対象とし、疾患サブタイプやハイリスク群患者の同定につながるバイオマーカー探索等にも取り組んできました。これらの研究成果の多くは、マイクロアレイや次世代シーケンサーといった分析機器を用いて取得した網羅的な生体分子データ（ゲノム、エピゲノム、トランスクリプトーム等のオミックスデータ）を解析することにより得たものです。オミックスデータ解析は、注目する表現型（疾患・形質）に関連する要因候補の同時分析を可能とするという特長を有し、表現型発現に関与する因子群の網羅的同定や、それら因子群が構成する複雑な分子ネットワークの全貌解明のための有効な手段と考えております。今後は、

研究対象を外因にもひろげ、外因となり得る生活習慣や環境などに関する網羅的情報の収集や、内因・外因を統合したオミックスデータベースの構築・整備を図るとともに、データ指向型科学（data-intensive science）の立場から、多面的オミックスデータに基づきヒト表現型多様性の成立基盤を明らかにする研究に取り組んでいきたいと考えております（図1）。これらの研究を通じて、個々人の違いを考慮した個別化医療・予防（precision medicine）の根幹となる知見の創出に寄与する所存です。

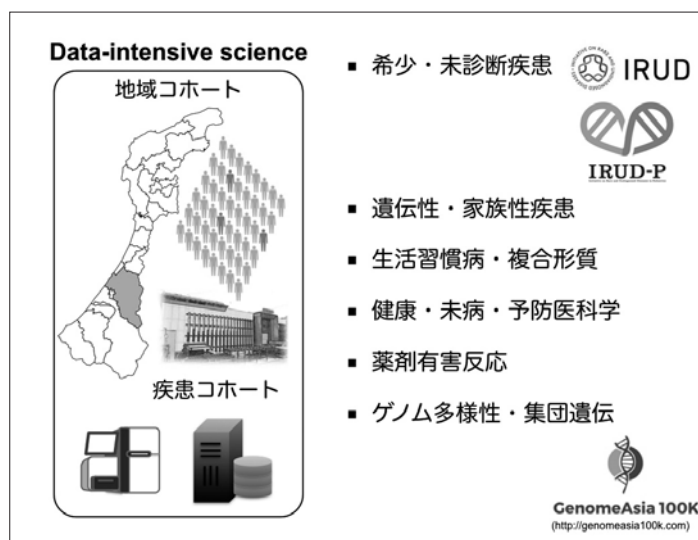


図2 分野として取り組む研究課題

すと非常に多岐にわたる（図2）、現在の研究室の規模を超えた領域をカバーすることになります。研究室に関わるメンバーそれぞれの興味に応じて、自由な発想のもと研究を実施することができ、環境作りを常に心がけていきたいと考えております。また、私どもの研究は、数多くの共同研究者の方々とともに執り行うものとなります。学内におきましても、基礎系・臨床系諸分野と連携させていた、基礎系・臨床系との新たな融合的研究を創成することにも貢献したいと考えております。今後とも、ご高導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

金沢／北陸 発の臨床開発を目指して 先端医療開発センターとの連携のもとに

金沢大学附属病院 臨床開発部 村山 敏典

特定機能病院に求められる高度な医療技術開発と研究支援を目的に、総合診療部を改組し、全国の大学病院に先駆けて平成二十六年十一月に金沢大学附属病院に臨床開発部が設置されました。

臨床開発とは、以前は企業が担っていた、新しい薬や医療機器などの候補(シーズ)を発見し、その安全性や有効性を見極め、少しでも早く患者のもとに届けら

れるように医療技術の実用化を支援する業務であり、私はそのシステム構築を研究しております。医師主導治験などの推進のために、国は十五か所の革新的医療技術創出拠点を選んでいます。残念ながらそのなかに北陸の拠点は含まれていません。国も地元も「北陸に拠点を」という期待は大きいでしょうし、それが当部の設立にも繋がっていると考えています。

- ・先進医療A 2017年6月現在 36種類
 - 1) 薬事承認範囲内の医療技術(下記2)を除く)
 - 2) 未承認・適応外の体外診断薬/検査薬(人体への影響が極めて小さいもの)
 - 例) ALL細胞の免疫遺伝子再構成を利用した定量的PCR法によるMRD量の測定、腹腔鏡下広汎子宮全摘術、LDLアフェレシス療法(和田教授)
 - ・先進医療B 2017年6月現在 67種類
 - 1) 未承認・適応外の医療技術(上記2)を除く)
 - 2) 薬事承認範囲内の医療技術であっても実施環境、技術の効果等について特に重点的な観察・評価を要するものと判断されるもの
 - 例) バクリタキセル/S-1併用療法(腹膜播種/進行性胃がん)
 - 血液浄化療法(コレステロール塞栓症)
 - 腹腔鏡下センチネルリンパ節生検(早期胃がん)
 - ミコフェノール酸モフェチル寛解維持療法(特発性ネフローゼ症候群)
 - ¹³¹I-MIBG内照射療法(難治性褐色細胞腫)(絹谷教授)
- 病院臨床試験審査委員会と厚労省先進医療会議 両方の審査が必要

先端医療開発センターと連携した、本研究の臨床開発の実例

- 研究費獲得支援(AMED革新がん、病院公募研究費、企業との共同研究...)
- 研究組織構築支援(研究代表者、各施設実施責任医師、生物統計家、データセンター、CRC、研究事務局、病院事務局、効果安全性評価委員会、モニタリング、監査、総括報告書)
- 薬事戦略支援(厚労省先進医療事前相談、PMDA医薬品戦略相談事前面談)
- プロトコル・説明文書作成/改訂支援
- 臨床研究保険加入支援
- 研究班会議支援
- UMIN-CTR登録支援
- 各施設スタートアップ会議支援
- モニタリング・監査対応
- 重篤有害事象報告支援(病院長・臨床試験審査委/厚労省/東海北陸厚生局/他施設/企業)
- 先進医療定期報告支援
- 施設間登録候補患者調整

倫理審査委員会認定制度構築事業

- ・研究倫理審査委員会報告システムには1,700を超える委員会が登録(治験審査委員会は1,200) 委員会審査の質が問題となっている。
- ・2016年度のAMED構築事業で金沢大学を含む18機関に設置された委員会が新たに認定 合計33機関
- ・臨床研究法(2017年4月14日公布) では、臨床研究(介入研究)について、厚労大臣が認定する臨床研究審査委員会の意見を聴く義務が課せられる。

上記認定制度とは直接関係はないが、

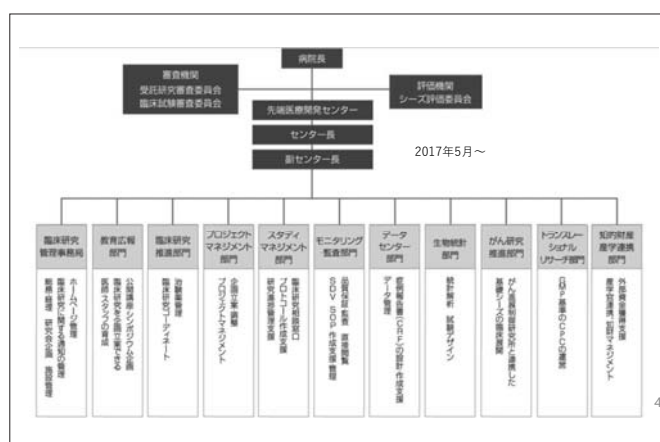
- 本講演では、先端医療開発センター(CREX)との連携による臨床開発に向けたこれまでの活動を以下の①～④を中心にご紹介し、抱負を述べます。
- ①ローカルスタディマネージャー(LSM)制度
 - ②臨床試験審査委員会の認定
 - ③最先端医療迅速評価制度第一号の先進医療
 - ④臨床研究中核病院を目指して
- 当部はまだまだ発展途上ではありますが、今後も金沢／北陸 発の医療技術の開発支援のために邁進いたしますので、引き続き十全同窓会諸先生方のご指導を賜りますよう、CREXともども、どうかよろしくお願いいたします。

先端医療開発センター

innovative Clinical Research

Center, Kanazawa University(CREX)

当院の基本方針に掲げる「臨床医学発展のための研究開発」を目指し、平成二十五年二月に臨床試験管理センターを改組しCREXが設置されました。現在十部門一事務局を擁する組織に拡大し、スタディマネジメント、試験デザイン立案支援、プロトコル作成支援、試験薬管理と臨床研究コーディネート、登録・データ管理、統計解析、モニタリングと監査、知的財産管理、細胞調整、がん進展制御研究所と連携した基礎シーズの臨床応用、研究者の教育等を実施しています。



脳科学に対する

脳神経外科的アプローチ

脳神経外科 中田 光俊

脳神経外科学は脳血管障害、脳腫瘍、頭部外傷を三本柱とし、他に中枢神経系の先天奇形、脊髄・脊髄・末梢神経疾患、てんかん・顔面けいれん・三叉神経痛・パーキンソン病などの機能的疾患を外科的に治療する学問領域です。金沢大学脳神経外科学講座は山本信二郎先生を初代教授とし昭和四十一年八月に開講し、昨平成二十八年に五十周年を迎えました(写真)。私は平成六年に金沢大学を卒業した後、直ちに山下純宏 二代目教授のもと入局し、米国への留学以降は濱田潤一郎三代目教授に師事し五十年間の歴史の後半を紡いでまいりました。昨今、医療を取り巻く様々なテクノロジーの進歩により、特にこの十年間の脳神経外科医療の進歩は目覚ましく、まさに隔世の感があります。開頭手術により頭蓋内病変を直接治療する手技は、ナビゲーションや電気モニタリング、腫瘍の蛍光ガイド、血管の蛍光造影、覚醒下手術の登場により安全確実に行えるようになりました。また非侵襲的手技として脳血管内治療や神経内視鏡治療の発展が著しく、適応疾患の範囲が急速に広がっています。我々の教室はこれらの治療ツールを主体に、この北陸を脳神経外科医療最先端地域にすることを目標に邁進しています。

現在、金沢大学では先進的な覚醒下手

術を行っており、県内外からの紹介症例が多く、他病院からの手術見学者を積極的に受け入れています。覚醒下手術は、術中に患者を覚醒させ、脳機能の局在を同定し、神経機能をリアルタイムにモニタリングする術式です。この手術では、手術中に脳機能を担保することから神経学的後遺症をきたす可能性が低くなります。また、脳機能領域の間際まで病変を取り去るため病変の摘出率が向上することが、多くのエビデンスから明らかになっています。これらの背景から本邦では平成二十六年に本手技が保険取載され、多くの施設で覚醒下手術が行われつつあります。

当教室が行う覚醒下手術は運動・感覚・視覚・言語といった日常生活に必須な神経機能のみならず、社会生活に必要な高次脳機能をモニタリングする点で先端的と言えます。高次脳機能とは「得られた情報を、それまでに経験した知識・記憶と関連付けて理解し、新たに記憶し、言葉を使って説明し、目的を持って行動する機能」と定義されます。一言でいうと、その人がその人らしくあるための脳機能です。その機能は前頭葉を中心に脳内で複雑なネットワークが形成され、脳内局在の詳細は不明です。

前頭葉は、動物の進化上、ヒトにおい

て高度に発達し、意欲・創造・機転・計画・注意の分配など高次脳機能を司る重要な部位です。しかしながら、脳神経外科学ではサイレントエリアと言われ、同部位に悪性脳腫瘍が発生した場合、病変の摘出に加え大きく前頭葉を切除するロベクトミーという手術手法が古くから容認されています。この手術コンセプトは、悪性脳腫瘍が周囲の正常脳に対して浸潤性に発育する事実から正当性があります。しかしロベクトミー後の患者は高次脳機能が障害され、社会生活が損なわれることが多いのが現状です。我々は覚醒下手術を応用し、病変を確実に除去し、かつ前頭葉が担う高次脳機能を温存する手術を試みています。時間に制限がある手術中に、的確に高次脳機能を評価する簡便な検査を独自に開発しています。これを用いて前頭葉の機能部位を同定し温存させることにより、高次脳機能障害を回避し患者の社会生活を損なわないことを目標に治療しています。

一方で、この覚醒下手術はヒト脳機能を開明に、脳科学の発展に貢献する手技であると捉えることができます。人の意識下に、脳皮質あるいは脳白質の神経線維を局所的に電気刺激し、神経回路を一過性に遮断することで脳機能局在を直接調べることが可能です。我々はこれまでに脳内の病変を摘出する過程で明らかになった作業記憶、視空間認知、社会的認知機能の脳内局在を報告してきました。ほかにも、これまで知られていなかった新たな脳の神経ネットワークや機能局在を突き止めています。

覚醒下手術はヒトの生きた脳に直接アプローチできる唯一の手段です。本手術

はヒトの様々な脳機能を温存させながら病変を摘出することを可能にするのみならず、脳の神経ネットワークに関する新たな科学的知見を提供します。脳神経外科学で脳病変を適切に治療しながら脳科学を拓き、神秘の臓器「脳」を開明にしていきたいと考えています。



平成 28 年 7 月 30 日 金沢大学脳神経外科教室開講 50 周年記念 於金城樓

冠動脈バイパスグラフトの機能的、

組織学的アプローチ

先進総合外科学講座 竹村 博文

高齢化が進む本邦において、動脈硬化に伴う心疾患が増えている。狭心症や心筋梗塞に対しては、食事療法や薬物療法そしてカテーテル治療の次に冠動脈バイパス術が行われている。冠動脈バイパス術が薬物治療より生存率を改善することが一九九四年に証明された後も様々な改良が加えられ、現在は全てバイパスに動脈グラフトを用いる、total arterial complete revascularizationが最善の方法と考えられている。中でも長期開存率を持つ内胸動脈は内科医も認める最強のグラフトである。

内胸動脈は大動脈からの二次分枝のelastic arteryである。拡張期優位に灌流する冠動脈において内胸動脈の拡張期血圧の評価は重要である。しかしその血流供給能に限界あるいは上限があると、最大運動時に心筋酸素需要を満たさない危険性がある。一九九〇年代より核医学的検査を用いて最大負荷時の血流供給能制限のあることを全国に先駆けて警鐘を鳴らしてきた。

内胸動脈—左前下行枝グラフトは患者生命予後を決める最も重要なグラフトである。グラフト閉塞は直接患者予後決定する。術後のグラフト開存の検索で閉塞が判明しても時すでに遅しであり、術中の吻合直後のグラフト評価が極めて重

要な検査となる。従来から吻合直後にグラフト血流測定を行なってきたが、平均血流量評価のみでは不完全であることより、超音波血流計を導入し、血流パターン、拡張期血流比率、抹消血管抵抗測定を行なってきた。その結果グラフト血流パターンは自己冠動脈の狭窄度に大きく左右されることを世界でいち早く報告した。さらに術中の正しいグラフト評価には自己冠動脈を一時遮断した状態での血流パターンの評価が極めて重要であることを報告した。またグラフト開存一〇〇%を求めるため画像診断としての超音波検査を導入しその効果を報告してきた。術中のグラフト評価により、吻合不全が疑われる場合には積極的に吻合のやり直しを行い、現在グラフト開存率は九九・七%と高率である。

動脈グラフトの長期開存は証明されている一方、静脈グラフトは長期開存率が低く、その改良が重要な研究テーマとなる。一九九〇年代には静脈グラフトの接着分子発現に着目し、まず静脈弁後では血流の乱流からと考えられる接着分子の発現が多いことを報告した。静脈グラフトの内膜肥厚が遠隔期のグラフト不全の原因と考えられることより、ウサギ内頸動脈の、静脈によるバイパスモデルを用いて、内膜肥厚防止に抗がん剤（ドキソ

ルビシン）や細胞分裂抑制剤（タキソテール）浸漬グラフトを用いると、内膜肥厚が抑制されることを報告した。今後も静脈グラフトの長期開存に関する研究を促進したいと考えている。

最近では吻合形態によるshear stressの比較を、コンピューターシミュレー

ション法を用い解析し、理想的吻合形態について報告している（図1）。長期成績を考慮しながら理想的治療法を追求する姿勢を、形態学的、機能的、組織的研究によりその正当性を証明していきたいと考えている。

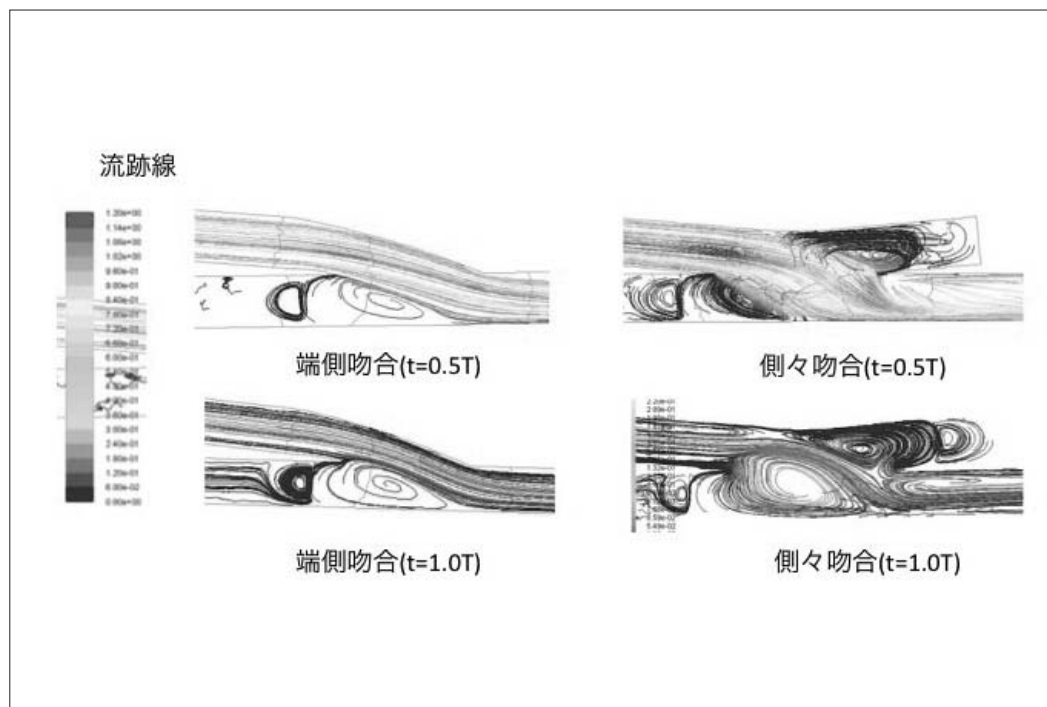


図1 流体力学シミュレーションを用いた端側吻合と側々吻合の流線の比較

第十三回金沢大学十全医学賞 金沢大学医薬保健研究域医学系 整形外科学

加藤 仁志（平成十三年卒業）

この度、「胸椎後縦靱帯骨化症に対する革新的手術の開発と治療戦略の確立」というテーマで、第十三回金沢大学十全医学賞を賜りましたことを大変光栄に存じます。

厚生労働省の指定難病である脊柱靱帯骨化症のなかでも、胸椎の後縦靱帯骨化症（OPLL）は、病態が重篤であり唯一有効な治療である手術も困難を極めます。後弯を有する胸椎のOPLLでは脊柱管を後方に拡大しても脊髄の除圧は達成されないため、十分な神経症状の改善をはかるには脊髄の前方除圧（OPLLの切除）が必要となります。しかし、胸椎OPLLの脊髄前方除圧術は、リスクや難易度が非常に高い手術であるため、一般的には脊髄後方除圧術しか実施されていないのが現状です。我々のグループは、胸椎OPLLに対して安全かつ確実に脊髄前方除圧を可能にする新しい手術を開発し、平成二十二年より臨床応用しています。この手術は、脊髄の局所的な圧迫が高度で症状が重篤となる嚙状OPLLに対し特に良い適応があり、他の大学病院などの専門施設でも近年この手術が追試されています。この手術の標準化に向けて、手術成績やその適応を今後も学会や学術雑誌に報告していきたいと考えています。

今回の受賞にあたり、ご指導を賜りました先生方に心より感謝申し上げます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

第十五回高安賞

高安賞は平成十五年、本学昭和三十九年卒業の臼井 澄先生のご篤志により設けられた賞で、優秀な学位論文を発表した博士課程修了者に贈られる。選考は、第一次審査会（主査および副査）と専攻長等から構成される選考委員会の二段階で行われ、医学系運営委員会と博士課程委員会の議を経て決定される。

平成二十九年年度受賞者には、次の三名が選ばれた。

最優秀論文賞 征矢 晋吾

分子神経科学・統合生理学（生理学第二）
Orexin Receptor-1 in the Locus Coeruleus Plays an Important Role in Cue-Dependent Fear Memory Consolidation（青斑核のオレキシン1受容体は手がかり依存的な恐怖記憶の形成に重要な役割を果たす） The Journal of Neuroscience 平成二十五年掲載

第十三回 黒川良安賞およびスロイス賞

医学類の成績優秀学生を顕彰する黒川良安賞およびスロイス賞の授与は、今年で十三回目を迎えました。両賞は、医王保護者の会の支援を受けています。

第十三回黒川良安賞は、平成二十八年年度卒業生の成績優秀者上位三名、入内島

優秀論文賞 諸葛 芬

細胞代謝栄養学

Dipeptidyl Peptidase-4 Inhibition by Linagliptin Attenuates Obesity-related Inflammation and Insulin Resistance by Regulating M1/M2 Macrophage Polarization（リナグリプチンによるDPP-4阻害は、マクロファージのM1/M2極性を調節し、肥満による炎症とインスリン抵抗性を減弱する） Diabetes 平成二十八年掲載

優秀論文賞 渡辺 知志

細胞移植学（内科学第三）
Imatinib Ameliorates Bronchiolitis Obliterans via Inhibition of Fibrocyte Migration and Differentiation（イマチニブは線維細胞の遊走と分化を制御することによって閉塞性細気管支炎の気道閉塞を抑える） The Journal of Heart and Lung Transplantation 平成二十八年掲載

平成二十九年七月一日（土）開催の金沢大学医学部十全同窓会総会で堀修 医薬保健学総合研究科長から各受賞者に賞状と記念盾および副賞賞金が授与された。（堀 修 記）

千晶さん、川上 遙さん、田邊 衣里佳さんに対して、平成二十九年三月二十二日の学位授与式の席上で授与されました。

また、スロイス賞は、三年次を修了した学生のうちから、成績優秀者上位三名、上久保 佑太さん、西野 真由さん、松岡 あかりさんに対して、平成二十九年五月二十七日に開催された医王保護者の会総会の席上で、授与されました。

（多久和 陽 記）

金沢大学医学部十全同窓会 会員情報変更サイトが新しくなりました

LOGIN 情報は、事務局より各会員あてに郵送でお知らせしております。
ご不明な点は事務局までご連絡ください
ようお願い申し上げます。
TEL : 076-265-2132
Email : juzen-ob@med.kanazawa-u.ac.jp



平成二十九年年度 会費納入のお願い

会費未納入の方は、同封の振込用紙をご利用の上、お納めくださいますようお願い申し上げます。

学会報告等

平成二十九年金沢大学十全医学会総会
ならびに学術集会開催報告

去る六月二十日(火)に金沢大学十全講堂において、平成二十九年金沢大学十全医学会総会ならびに学術集会が開催されました。

総会では、まず会長の太田哲生より庶務報告、会計担当理事の藤永由佳子先生による会計報告、編集担当理事の土屋弘之先生による編集報告が行われ、その内容が承認されました。引き続き、平成二十八年度(第十三回)十全医学賞授与式ならびに十全医学賞受賞記念講演が行われました。今回、十全医学賞は金沢大学医薬保健研究域医学系整形外科の加藤仁志先生が受賞されました。加藤先生の受賞研究課題名は、「胸椎後縦靱帯骨化症に対する革新的手術の開発と治療戦略の確立」で、受賞記念講演では開発された胸椎(PLL)の手術方法、経緯とその利点や適応について紹介されました。金沢大学十全医学会雑誌の第一二五巻第三号に掲載されていますので、是非一読いただければ幸いです。

また、本年度の学術集会は、学術集会担当理事の和田隆志先生、河崎洋志先生



生、華山力成先生が中心となって、そのテーマを「イメージングの進歩」とし、外部講師として現在内外で八面六臂の活躍を繰り広げておられる梶島健治先生(京都大学大学院医学研究科皮膚科学教授)、特別講演に末松誠先生(日本医療研究開発機構理事/慶應義塾大学医学部客員教授・医化学教室)をお招きし、さらに、学内講師として古寺哲幸先生(金沢大学理工学研究域バイオAFM先端研究センター准教授/独立行政法人化学技術科学技術振興機構さきがけ)、絹谷清剛先生(金沢大学医薬保健研究域医学系核医学教授)にも加わっていただき、それぞれの先生方の視点から見た「生命科学分野での新たなバイオイメージングによる基礎と臨床研究の融合」について、さらにはガスバイオロジーの先端研究におけるガス分子受容体探索と医学・創薬研究の新たな展開について、最新の知見を交えながら分かり易く教育的に講演をしていただきました。今回の学術集

会には、五時間にも及ぶ長丁場でありましたが、それでも最後まで質義応答が活発に行われ、参加者の皆様方の「医療現場におけるイメージングの進歩」に対する関心の高さに驚かされた次第です。

最後になりましたが、本学術集会の開催に向けてご尽力を賜りました関係者各位ならびに学術集会に参加していただきました会員の皆様方に心より感謝申し上げます。

(十全医学会会長 太田 哲生 記)

第七十二回 日本消化器外科学会総会

二〇一七年(平成二十九年)七月二十日(木)、二十一日(金)、二十二日(土)の三日間、石川県立音楽堂ならびにJＲ金沢駅周辺施設において太田哲生会長のもと、開催させていただきました。

本学会は昭和四十三年四月に、消化器外科学の進歩ならびに普及に貢献し、もって医療に関する学術文化並びに国民の福祉と医療の発展に寄与するとともに、会員である医師等の消化器外科学の研究、教育及び診療の向上を図ることを目的として発足し、本総会の金沢での開催は、第五代教授、宮崎逸夫先生が昭和六十三年に会長を務めて以来二十九年ぶり二度目の開催であります。

太田会長の開会のあいさつで三日間の日程がはじまりました。本総会では「医学の既成概念への挑戦」をメインテーマとして掲げ、約七千人の会員が集い、三千五百題の演題に熱い議論がなされました。

企画プログラムとして、二つの特別講演と海外招待講演、三つの教育講演と教育セミナー、六つの特別企画、十四のシンポジウム、五つのパネルディスカッション、十五のワークショップのほか、米国の Society of Surgical Oncology (SSO) とのジョイント・シンポ



第十回国際アルファ線標的治療シンポジウム 10th International Symposium on Targeted Alpha Therapy, TAT-10



平成二十九年五月三十日～六月一日に、石川県立音楽堂で第十回国際アルファ線標的治療シンポジウム (10th International Symposium on Targeted Alpha Therapy, TAT-10) (大会長絹谷清剛、実行委員長本学保健学科鷺山幸信) を開催いたしました。従来の二倍に相当する合計二百二十五名 (海外百十名) の参加を得て盛会となりました。

内用療法とは、悪性腫瘍に発現する種々の分子をターゲットとする放射性医薬品を、全身投与 (時に局所投与) することによって行う分子標的治療です。これまでは主にベータ線核種が利用されてきましたが、近年、アルファ線核種の応用に期待が高まっています。アルファ線は細胞障害性が高いため、生体応用は危険であると考えられた時代がありました。が、分子標的薬として適切にデザインされたものであればベータ線核種よりむしろ安全です。放射性医薬品はいわゆる分子標的薬の性質を持ち、標的に結合しない画分は速やかに対外排泄されることに加え、アルファ線の組織内飛程は数十ミクロンであるため、正常組織被ばくが低くなるという利点を有します。さらに、標的組織に与えられるエネルギーが大きいことより、

ジウムも行われました。これら企画プログラムのうち二十六のセッションでは英語による発表と討論、一般演題もすべて英語表記によるスライド発表となり、本総会にも国際化の波が押し寄せています。共催セミナーとして実に五十のランチョンセミナーと三つのイブニングセミナーも企画され、会員の皆様には広い領域にわたり見識を得ることができたものと思います。

本総会では、太田会長の「学都かなざわ」と「薬都かなざわ」を融合させた運営をしたい、という想いに沿って、学術発表のみならず、開会式前の谷内江潤子さんによるパイオルガンの幻想的な演奏や、一日目のプログラム終了後には陸上自衛隊中部方面音楽隊による軽やかで力強いマーチの演奏、会長招宴における

金沢素囃子など、随所に音楽を取り混ぜて進行したことが本総会の特徴でした。

まだ梅雨明け切らぬ中での開催でしたが、三日間通して晴天に恵まれ、二十一日夕方からのしほのき迎賓館前の緑の広場で開催された全員懇親会には約千人の会員が参加し金沢の食と文化 (加賀鳶、メデイカルスタッフ・初期研修医セッション) に触れていただきました。また、二十名が優秀演題賞に選ばれ、太田会長から賞状と賞金を一人ずつに手渡され、記念撮影も行いました。これをきっかけに外科医に育ってくれるものと大いに期待されました。最後に、本総会開催・運営に多大なご支援をいただきました金沢大学十全同窓会はじめ関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。(伏田 幸夫 記)

治療効果が大きいことがわかっています。昨年、去勢抵抗性前立腺癌骨転移に對して²²³Ra (Caと同族で骨転移巣に強集積する) が我が国でも承認されルーチン使用されています。

本シンポジウムは隔年開催で、我が国における開催は今回が初めてです。実は、我が国の内用療法開発は、欧米諸外国から著しく遅れています。今回これを誘致した目的のひとつは、国内研究者の活性化を行いたいということにありました。対抗候補地もありましたので、日本政府観光局 (JNTO) コンベンション誘致事業で設定されているキーパーソン招請事業を利用して、本シンポジウムの代表世話人の立場を務めるお一人を金沢に招請することで誘致に成功しました。海外

参加者からは日本のホスピタリティは素晴らしいと賞賛をいただくとともに、学術的にも規模・質 (口演三十六、ポスター三十八、ランチョンセミナー二) ともに過去最良であるとする海外参加者から言葉をいただきました。

末尾ではありませんが、本会の開催にあたって終始ご支援をいただいた県市の関連機関、企業、十全医学会、済美会等々に感謝申し上げます。このシンポジウムが、我が国の内用療法発展に寄与することを祈念いたします。

URL: <http://nucomed.w3.kanazawa-u.ac.jp/symposium/tat10/>

(絹谷 清剛 記)

平成二十九年度 金沢大学関連病院長会議

平成二十九年度金沢大学関連病院長会議が平成二十九年七月一日(土)に金沢大学附属病院四階宝ホールで開催された。

山田哲司会長(石川県立中央病院)の挨拶の後、議長に品川誠理事(市立輪島病院長)が選出された。なお、平成二十九年四月に金沢大学附属病院担当理事に就任された大竹茂樹先生がオブザーバーとして参加した。

まず、平成二十八年度収支決算、平成二十九年度予算が承認された。

次に役員、役員の異動、金沢大学附属病院の人事異動等が報告され、それぞれから自己紹介、簡単な挨拶が行われた。なお、会員数は八十四、出席病院は六十二病院であった。

引き続き行われた意見交換会では、はじめに病院長代理、多久和陽医学類長、稲垣美智子保健学系長から、挨拶並びにそれぞれの現況等について報告が行われた。病院長の代読として、若手医師の確保と育成の重要性が強調された。ブロック別の要望では、富山県から医師の高齢化問題、若手医師の養成・確保と計画的な人員配置、石川県から研修医・専攻医も含めた若手医師育成・確保、女性医師の支援策などが要望された。さらに、福井県から女性医師の支援、不足する診療科の医師の育成と配置が要望された。この中で、病院長代理から金沢附属病院では女性医師対策に対して、夜間・病児保育などの対策を取っていることが示された。さらに、内科再編成について、多

久和陽医学類長からその必要性と今後の見通しが示された。金沢大学附属病院は北陸を中心とした地域医療の要として、関連病院と連携して質の高い医療を提供してきた。この中で、関連病院会は情報交換の場として非常に重要であるとの意見交換がされた。

来年の関連病院長会も七月七日(土)に開催することとし、会を終了した。

(和田 隆志、蒲田 敏文 記)

御遺骨返還式・合同慰霊祭

平成二十九年度の御遺骨返還式・合同慰霊祭は六月十七日(土)午前十時、十全講堂での文部科学大臣感謝状伝達式から始まり、池端良伸総務課長による開式の辞に引き続き、多久和陽医学類長よりご遺族おひとりおひとりに文部科学大臣感謝状が伝達され、感謝の言葉を各家族の皆様へ述べられました。

献体者御遺骨返還式は午前十時半から、ご遺族の皆様、しらゆり会会長井沢義武様、理事長竹山雅万様をはじめとしたしらゆり会役員の方々、会員の皆様にご出席いただき、多久和陽医学類長、医学系と附属病院の教職員、学生が出席して始まりました。名誉会員三十二名のご冥福を祈って黙祷をさされた後、祭主の多久和陽医学類長が追悼の言葉を述べられました。出席者全員が壇上の御遺骨に感謝の気持ちをこめて献花をし、多久和陽医学類長から御遺骨がご遺族に返還されました。最後に学生を代表して井村慎吾君(三年生クラス代表)

が感謝の言葉を申し上げ、解剖学教育と献体業務の担当者を代表して機能解剖学教授 尾崎紀之がお礼の言葉を申し述べました。

合同慰霊祭卯辰山墓地法要は午後一時から金沢大学医学部卯辰山墓地において、覚林寺ご住職のご読経とご講話を賜り、肅然と営まれました。ご遺族としらゆり会の皆様のご臨席を仰ぎ、多久和陽医学類長、教職員と学生が参列し焼香、参拝しました。この墓地には、明治二十年の第四高等学校医学部から現在に至るまでの、約六千名の献体者の芳名墓碑が三十六基あり、井沢義武しらゆり会会長のご尽力もあり、金沢市よりその整備についてご配慮をいただいています。

第百十五回合同慰霊祭は午後二時半に始まりました。祭壇には正常解剖と病理解剖に御体を捧げられた百七十二名のご芳名を記した聖額が立てられ、ご遺族と



ご来賓、しらゆり会役員ならびに会員の皆様のご臨席を仰ぎ、多久和陽医学類長、蒲田敏文附属病院病院長、医学系と附属病院の教職員、そして学生が参列しました。黙祷の後、多久和陽医学類長が追悼の言葉を述べられ、出席者全員が献花をしました。最後に蒲田敏文病院長が謝辞を述べられ、午後三時半過ぎに終了となりました。

七月五日(水)、金沢大学医学部卯辰山墓地で献体者孟蘭盆会法要が営まれました。多久和陽医学類長をはじめとする医学系の教職員多数の方々が参列されました。覚林寺ご住職のご読経を賜り、参列者一同で献体者の冥福を祈りました。墓地法要終了後、十全同窓会が平成十四年十月に修造して下さったホルトルマン(金沢医学所教師)愛児(明治九年〜十年歿)の墓碑にも参拝しました。

(尾崎 紀之 記)



十全學術行脚

第二十五回

霞ヶ関

【おつまみ】

霞ヶ関には、「医系技官」と呼ばれる、医師免許もしくは歯科医師免許を有する技術系行政官が働いています。医学部を卒業し臨床現場等で勤務したのち、厚生労働省に採用され、保健・医療・福祉・労働に関する部署等において、法学部や経済学部を卒業した事務系行政官とともに、各種の保健・医療行政施策の企画・立案・運営の中核を担っています。また、内閣官房、外務省、文部科学省、防衛省など厚生労働省以外の中央官庁や地方自治体（北陸では石川県、富山県、WHOなどの国際機関や大使館等にも活躍の場があり、出向の形で多くの医系技官が勤務しています。医系技官として合計三百余名が勤務していますが、十全同窓会会員としては現在厚生労働省に五名と防衛省に一名が働いていますので、それぞれの近況をご報告させていただきます。

一、佐原 康之

（厚生労働省 大臣官房審議官）

平成元年に金沢大学を卒業し、神奈川県立こども医療センターで小児科医として勤務した後、労働省との合併前の厚生省に入省しました。入省後、省内の様々な部局に勤務するとともに、ハーバード大学公衆衛生大学院への留学やWHO本部での勤務など、日本の保健医療を世界から見る機会や、和歌山県の健康局長と

して、へき地医療や母子保健・精神保健など地域に根ざした業務に従事する機会にも恵まれました。現在は厚生労働省の「大臣官房」という、一般企業で言えば社長の秘書部門のような部署で、①人工知能やゲノム医療など科学技術・イノベーション政策の企画・立案、②日本人の死因の第一位を占めるがん対策、③地震やテロ、重大な感染症等の発生時の健康危機管理などを担当するとともに、医系技官の採用を所掌しています。金沢大学卒業の医系技官は、私と鈴木貴士君だけという状況が長かったのですが、最近霞ヶ関に同窓生が増え、また、昨年は金沢大学の国際保健学分野教授に厚労省医系技官出身の町田宗仁氏が就任し、うれしい限りです。

二、鈴木 貴士（防衛省 人事教育局衛生官付 国際衛生班長）

私は平成十八年に金沢大学を卒業し、国立国際医療センターでの初期臨床研修を経て、平成二十二年に厚生労働省に入省いたしました。これまで、国際関係を担う部署（WHOとの政策調整、食品の安全性に関する部署（東日本大震災を受けた食品中の放射性物質の管理の問題）、医師資格制度を運営する部署などに勤務して参りました。海外関係業務の機会にも恵まれ、パリの経済協力開発機構（OECD）に出向する機会も頂きました。

現在は、防衛省に出向し、自衛隊による国際医療支援や衛生部隊の海外活動に関する業務に従事しております。

振り返ってみますと、入省時には想像もしていなかったような業務に従事することもあり、常に勉強の毎日ですが、行政の仕事の奥深さとやりがいを感じております。医系技官の仕事は、国民からの負託に基づいて行うものであり、負っている責任も非常に大きいものがあります。しかしながら、科学に立脚して考えるべきこと、常に患者（国民）の幸せを第一に考えるべきことは、臨床の先生方の思考と同じであり、医師が担う仕事の一つとして魅力あるものではないかと思っております。

三、稲本 杏史（厚生労働省 医政局地域医療計画課課長補佐）

平成十七年卒業の稲本と申します。平成二十九年四月より人事交流の一環として金沢大学より医政局地域医療計画課に着任いたしました。地域医療計画課は、医療計画における五疾病五事業のうち五事業を所管し、他にも医療体制の根幹に関わる多くの業務も所管しています。私のバックグラウンドは核医学で、医療放射線管理についての技術的支援のため、大学というよりは学会からの声かけに応じた形の入省です。課内では主に医療放射線管理、院内感染対策へき地医療を担当しています。着任したの頃は戸惑うことが多かったですが、周囲の方々のバックアップのおかげで、むしろ畑違いの分野について楽しんで仕事をしています。厚生労働省での仕事は必ずしも自分の知識を生かせるとは限りませんが、日本の医療行政の根底に何があるのかを理

解し、その結果として自分の視野を広げることができるまたとない機会であると考えます。大変な仕事ではありますが、個々の患者に対する医療だけでなく、公衆衛生に少しでも興味のある方ならば、厚生労働省に勤めたことは決して後悔しないと思います。

四、柳川 侑子

（厚生労働省 子ども家庭局母子保健課 課長補佐）

私は、学生時代より公衆衛生に興味を持っていました。平成二十一年に金沢大学を卒業し、専門医取得までは多くの症例が経験できる聖路加国際病院を選び、臨床研修及び小児科専門研修を終え、小児科専門医を取得しました。研修終了後は妊娠・出産もあり、臨床は週二回の外来のみとし、東京大学大学院へ進学し公衆衛生の勉強を開始しました。大学院二年目に自分の研究の方向性を定めるため、政策の立案・実行までの過程を勉強したいと考え、人事交流として厚生労働省母子保健課に勤務することになりました。課内では母子感染対策や乳幼児健診、虐待予防、生殖補助医療など、幅広く担当させていただいています。立場が変われば、物事の見方も変わり、大変勉強になる日々を送っています。また、臨床では現場にいないければ仕事にならない場面が多いと思いますが、医系技官の仕事はデスク上でできる仕事も多く、テレワーク等を利用しながら仕事ができるため、育児との両立もしやすいのではないかと思います。女性医師のキャリアも多様化し、家庭との両立に悩んでいらっしゃる方もいるかと思えます。そのような方にキャリアの一選択肢として、ご参考になればと思います。

五、小倉 央行

(厚生労働省 保険局医療課 先進・再生医療開発戦略専門官)

私は、平成二十二年に本学を卒業し内科医として勤めておりましたが、御縁があつて平成二十八年から、金沢大学よりの人事交流として、保険局医療課で勤務しております。

医療課が所管する診療報酬については、中央社会保険医療協議会において、在宅医療、外来医療、入院医療、新しい医療技術の保険適用や費用対効果評価など、様々な医療保険分野に関する議論が行われております。医療課は、その議論に向けてデータやエビデンスの収集・提案等を行っており、私は、主に医療技術や費用対効果評価を担当しております。特に費用対効果評価については、現在、平成三十年度からの制度化に向けて検討が進められ、正に新しい制度が立ち上がるところであり、貴重な経験をさせて頂いております。厚生労働省では、様々な分野の方々から御指導を頂きながら、臨床現場とは違った視点で医療に携わることができ、今後の人生にも大きな影響を与えるものと考えております。

六、神代 和明

(厚生労働省 健康局結核感染症課 医療専門職)

はじめまして、平成十六年卒業の神代和明です。日本で臨床研修後、オレゴン健康科学大学での内科研修、ウイスコンシン大学での感染症のフェローシップ修了を経て、オレゴン健康科学大学の予防医学・公衆衛生レジデンシーの道へすすみました。「予防医学・公衆衛生」と一言で言っても、カバーする領域は非常に

広く、またレジデントの専門性や卒業後の進路も様々ですので、各自の興味のある分野で疫学研究・医療政策プロジェクトに参加します。また、最近米国では、医療の質の改善や医療ミスをなくす試みの重要性が、病院やクリニックは勿論、州や地域の保健局といった公的機関、医療コンサルタント会社などあらゆるレベルの医療システムの中で求められており、予防医学レジデントもこの領域で活躍する場が広がっています。

今年の四月より厚生労働省結核感染症課、感染症危機管理プログラム(I-DES)に参加しております。I-DESは、国際的に感染症制御のマネジメントを実施することができる専門能力を身につけた感染症危機管理の専門家を養成する目的で、三年前に立ち上がったプログラムです。一年目は厚生労働省や国立感染症研究所で、また二年目はWHOや米国CDCなどに勤務します。私自身のバックグラウンドを生かしながら、国際的に脅威となる感染症に対する危機管理のため、感染症に関する臨床経験や疫学知識のみならず、行政マネジメント能力、国際的な調整能力等、総合的な知識と能力を身につけることができると考えております。

(番外編) 町田 宗仁教授

(金沢大学医学系国際保健学)

平成二十八年四月一日付で、厚生労働省より金沢大学に赴任した町田宗仁と申します。ご縁があり、同日付で新設された医学系国際保健学を担当しております。私は平成十一年に福島県立医科大学を卒業、臨床研修を経て当時の厚生省に入省した後は、総務省や環境省、長野県、

WHO西太平洋地域事務局への出向を含め、いろいろな行政機関での多岐にわたる業務を経験することができました。教育職は初めての経験であり、日々、試行錯誤を続けております。講義や基礎配属(第三学年向け)、各種セミナーにおいて、担当の国際保健という分野の紹介に加えて、行政で働くという選択肢があることを、学生にお伝えできればと考えております。思い起こすに、私が社会医学系や行政医師の仕事に興味を持たせてくださったのは、金沢大学医学部昭和三十四年卒業で、福島県立医大公衆衛生学講座教授でいらつしやつた福島匡昭先生(金沢大学衛生学講座出身の元厚生省医系技官)でした。

「おわりに」

国の行政機関で医師として働くということは、臨床医として勤務することとは随分と違った毎日です。一人一人の患者さんを直接治すわけでもありませんし、仕事の成果がすぐに見えるわけではありません。むしろ、五年、十年、あるいは三十年という長いスパンで国の将来を考え、どのような制度や仕組みを作っていくことが国民のためになるのか、日々悩みながら仕事をしています。良い行政を行うためには、苦情/苦言も含め、様々な立場の皆さんのご意見を伺うことも重要なことです。十全同窓会の皆さんからの厚生行政へのご意見も、今後も様々なチャンネルを通じてうかがえればと思います。

なお、厚生労働省医系技官の採用試験は、年二回行っており、詳しくは以下のウェブサイトをご覧ください。また、厚生労働省での勤務に興味がある方は、佐原宛



十全同窓会@霞が関

(左から佐原、稲木、神代、町田、小倉、柳川、鈴木)

<sahara-yasuyuki@nhlw.go.jp>に、ご連絡ください。最後に、本寄稿の機会をいただきました十全同窓会報編集委員の皆様には感謝申し上げます。

(佐原 康之 記)

厚生労働省 医系技官採用ウェブサイト

<http://www.nhlw.go.jp/kouseiroudoushou/saiyou/ikei/index.html>

厚生労働省 感染症危機管理プログラム

(I-DES) ウェブサイト

http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsite/bunya/kenkou_inyou/kenkou/ides/index.html

厚生労働省 感染症危機管理プログラム (I-DES) ウェブサイト

病院紹介

医療法人社団浅ノ川
浅ノ川総合病院

【沿革】

浅ノ川総合病院は昭和二十六年に東山（現在の馬場小学校横）に開設されました。当時は木造二階建ての内科のみの小さな病院でしたが、地域の皆さまと共に四階建ての大きな病院に育ちました。昭和四十四年には春日町へ移転し、五百床の総合病院となりました。当時、金沢医科大学病院は設立準備中で、金沢医科大学病院の暫定付属病院だったこともあり、昭和六十二年に現在の小坂町へ移転。平成十九年に人工呼吸センター設置、平成二十年に回復期リハビリテーション病棟設置、平成二十六年に地域包括ケア病棟設置など増改築を重ね、現在、一般病棟二百五床、人工呼吸病棟四十七床、地域包括ケア病棟八十七床、回復期病棟五十床、医療療養病棟百十床の計四百九十九床のケアミックス型病院となっております。

現在は機能の異なる五つの病院（浅ノ川総合病院、桜ヶ丘病院、心臓血管センター金沢循環器病院、金沢脳神経外科病院、千木病院）と一つの老人保健施設を運営する『医療法人社団浅ノ川』の基幹病院として、総合的な急性期医療を担うとともに、協力関係施設のケアセンター、グループホーム、特別養護老人ホームなどと連携しながら、医療、介護、福祉が一体となった切れ目のない医療提供体制を構築しています。

【高精度医療機器を用いた質の高い医療を实践】

平成九年に放射線のメスといわれる定位放射線手術装置「ガンマナイフ」を日本海側で最初に導入し、転移性脳腫瘍を中心に通算五千百例以上の治療を行っています。平成十六年には高精度放射線治療装置「ノリス」を日本で初めて導入し、肺癌、食道癌、肝臓癌、脾臓癌、前立腺癌など全身の腫瘍を対象に、通算三千百例以上の治療を行っています。定位放射線治療は腫瘍のみに高線量・高精度のピンポイント照射を行うため、低侵襲で副作用が少なく、手術に劣らない治療効果を得ることができます。平成十七年には石川県初の「PET-CT」を導入し、癌の検出、病状の評価が容易かつ正確になりました。当院では全例で二回の撮影を行う「二回撮影法」を行い、小さな癌をより確実に検出するよう努めています。平成十八年には「CT-MRI」、平成二十四年には金沢エリア初の「三百二十列CT」を導入することで、最先端の画像診断機器による診療、検診に威力を発揮しています。結石破砕治療センターでは平成元年に日本海側で初めてドルニエ社MPL-9000を導入し、ESWLにより尿路結石のみならず、胆嚢結石・肝内結石・総胆管結石・脾石の治療にも力をいれ、低侵襲で質の高い大きな成果を挙げています。平成二十五年に院内の超音波装置を集約し「超音波センター」を開設、平成二十九年には「超音波専門医研修施設」に指定され、超音波検査士の認定技師を中心として臨床診断に有用な情報を提供しています。平成二十八年には最新の核医学撮影装置を導入し、アルツハイマー型認知症などの診断が容易になりました。

【救急から在宅まで、地域の医療を守り支える】

当院では、がん医療、救急医療、地域連携の三つを柱に、地域の皆さまから選ばれる温もりのある病院を目指しています。石川県地域がん診療連携推進病院として手術、化学療法、放射線治療などを組み合わせた専門的ながん医療の提供や、いざという時に断らない救急の提供に努めています。近年は団塊の世代の高齢化や少子化が進み、社会医療費の増加とともに国民一人一人の医療環境はますます厳しくなりつつあります。このような時代にあつて当院ではサービスの低下を招かぬように心掛け、最新、最良の医療を提供しつつ、今後はさらに福祉の面にも力を入れていくつもりです。そこで平成二十九年四月からは当院の理念を『救急から在宅まで、地域の医療を守り支える病院を目指します』に変更しました。

【今後の取り組み】

これまで述べてきたように救急医療の充実、在宅医療連携を進めるだけでなく、医療福祉連携をも視野に入れつつ、組織を再編成



し、また予防医学としての健診の強化も考えています。喫緊の課題としては呼吸器、血液内科の医師の確保が急務です。そして建物の老朽化も進んでおり、病院新築も視野にいれ考えていかなければなりません。

（病院長 荒木 一郎 記）

病院紹介

福井県立病院

沿革

昭和二十五年四月に福井県立病院（百床）と福井県立精神病院（百五十床）が創立されました。それぞれ独立して運営されてきましたが、平成十二年四月に福井県立病院（六百七十七床）と福井県立精神病院（四百床）が組織統合されました。平成十九年に現在の新病院が完成・竣工、平成二十三年三月には日本海側初の陽子線治療施設の運用が開始され、現在に至っております。

概要

福井県で唯一の県立総合病院であり、第六次地域医療計画に基いて、五疾病・五事業への対応や高度医療を担う急性期病院です。診療科は、内科・神経内科・循環器内科・小児科・外科・整形外科・形成外科・脳神経外科・心臓血管外科・皮膚科・泌尿器科・産科・婦人科・眼科・耳鼻咽喉科・歯科口腔外科・麻酔科・リハビリテーション科・放射線科・核医学科・病理診断科・精神科で、中央医療センター、こころの医療センター、救命救急センター、母子医療センター、健康診断センター、がん医療センター、陽子線がん治療センターの七センターで運用されています。許可病床は、一般・六百六十八床、結核・十床、感染症・四床、精神・二百七十九床の計九百六十一床で、一般病床は、七対一の看護体制をとっています。JR北陸本線の上り列車から、福井駅の手前、左手に病院の外観が一望できます。

当院の役割・特徴

1. 福井県全体を診療圏とする急性期病院としての機能強化

臓器別診療体制を有する中央医療センターを核として、優秀な医療スタッフの確保や高度な医療機器の整備充実を図り、重篤な患者や複数疾患の合併症に対応する病院として、県全域を診療圏とする高度の急性期医療を提供しています。

2. 高度・特殊・先駆的な医療の提供

（1）高度で質の高いがん医療の提供
都道府県がん診療連携拠点病院の指定を受けており、がん医療センターの整備・拡充として、がん専門病棟の設置・外来化学療法治療体制の充実等により、胃がん、大腸がん、乳がん等の治療成績の向上に努めています。陽子線治療センターでは、肺・肝・前立腺等の固形がんを対象に、世界初の積層原体照射システムの導入やCT自動位置決め装置などで副作用が少なく体に優しい治療を提供しています。金沢大学附属病院に外来を設置し患者確保に御協力をいただいております。

（2）リスクの高い妊娠や分娩、低出生体重児への高度な医療の提供

総合周産期母子医療センターとして、MFICU（母体・胎児集中治療室）、NICU（新生児集中治療室）、GCU（新生児回復期治療室）において二十四時間体制で妊娠、出産から新生児までの高度専門的な治療を提供しています。

（3）緩和ケアへの取り組み

悪性腫瘍患者または後天性免疫不全症候群患者を対象に、緩和ケアセンターや緩和ケア病棟を整備し、積極的に緩和ケアを実施しています。

（4）精神科急性期医療への対応

今年の秋より、こころの医療センターの病棟の再編を行い、精神科救急患者や身体合併症患者など、一般の精神病院で

は対応が困難な急性期および重症患者に対する多職種協働のチーム医療を実施する予定です。

（5）全身の血管病への対応

高齢化や食生活の欧米化による動脈硬化に起因する血管疾患に対して、院内の科を横断した「脳心臓血管病センター」を平成二十八年四月に開設しました。

機能の充実を目指し、「ハイブリッド手術室」の整備も進んでおります。

3. 第三次救急医療の充実

救命救急センターには非公共用ヘリポートを備え、北米型ER方式により県内全域を対象に二十四時間体制で救命救急に対応しています。

4. 基幹災害拠点病院としての機能

建物は、大震災に備えた免震構造を採用するとともに、大震災時の停電においても病院機能継続のための電気・水等の供給設備を備え、大規模災害時の多数の患者の診療に対応できます。

5. へき地医療支援の機能

当院にはへき地医療支援機構を設置し、全県的なへき地医療支援対策の企画・調整、代診医派遣にかかる調整、医療従事者に対する研修計画等を担っています。

6. 地域医療機関との連携の推進

地域医療支援として、他の病院や診療所等、地域の医療機関と適切に役割分担し、連携を推進するために、地域連携パスの整備・推進や退院支援専任職の配置などを行っています。

7. 研修機能の充実

基幹型臨床研修指定病院として、初期研修医の採用・研修を行うとともに、救急に強い家庭医の養成などの後期研修にも力を入れています。平成三十年四月からの新専門医制度に向けても、六領域で基幹施設として申請しております。

地域において必要な医療を安定的かつ

継続的に提供していくために、自治体病院には経営の効率化と持続可能な病院経営が求められています。当院でも、平成二十八年三月に経営改革プランが策定され、これを推進する目的に平成二十八年九月には中期経営計画が作成されました。二〇二五年に向けた地域医療構想の具現化や、来年度の診療報酬と介護報酬の同時改定等、医療を取り巻く環境は非常に厳しい状況ですが、これからも、総合的かつ高度な医療の提供を通じて、県民に信頼され、心あたたまる病院をめざして努めていく所存です。十全同窓会の会員の皆様にはこれまでと同様、ご指導・ご協力のほど、よろしく申し上げます。

（病院長 橋爪 泰夫 記）



教室だより

血管分子生物学
(旧生化学第二)

研究分野の沿革

生化学教室の源流は、大正二年（一九一三年）金沢医学専門学校の医学講座に須藤憲三教授が着任されたことにはじまります。その後、昭和三十八年（一九六三年）四月、生化学第二講座が久野滋教授を初代講座主任として開講しました。同門からは岡田利彦・金沢医科大学教授（生化学第一講座）、武藤明・福井医科大学教授（生化学第一講座）、犬塚学・福井医科大学教授（化学講座）、小平憲一・富山大学工学部教授（細胞工学講座）が輩出しました。平成二年（一九九〇年）三月、久野滋教授が定年退官され、同年十月、山本博教授が第二代教授として着任されました。この間、細野隆次・本学保健学科教授（生体情報学）、金子二久・金沢女子短期大学教授（生活文化学科）、山岸昌一・久留米大学医学部教授（糖尿病性血管合併症病態・治療学）、原田真市・本学教育研究支援センター准教授、米倉秀人・金沢医科大学教授（生化学第二）、渡邊琢夫・金沢学院大学教授（健康栄養学科）が輩出しました。平成二十六年（二〇一四年）三月、山本博教授は退職され、同年四月から金沢大学理事・副学長に就任され、その後平成二十九年四月からは公立小松大学の学長予定者として異動されています。平成二十七年（二〇一五年）五月から山本靖彦博士が第三代教授として教室を主宰しています。現在、教授を含めた教員三名、事務補佐員一名、大学院生十四名（臨床教室からの派遣を含む）、学外共同研究員



二名、学類学生十九名が所属し、教育及び研究を進めています。

研究の紹介

現在、当研究室では「ポストゲノム」「代謝」「血管」をキーワードに、様々な生理的あるいは病態研究を、生化学・分子生物学・細胞生物学・実験動物学的手法を用いて展開しています。

一、ポストゲノム研究…生命活動におけるグリケーション（糖化、メイラード）反応

生体はグルコース（ブドウ糖）をはじめとする糖質を利用し、エネルギー源であるATPを産生することで生命活動を維持しています。また、糖系においてグルコース代謝の中間産物であるグリセルアルデヒド3-リン酸を経由して、健全な状態においても常に数%程度、副産物として非常に反応性の高い α -ジカルボニル化合物のメチルグリオキサールを生じています。しかし、グルコースやメチルグリオキサールは、生体内のさまざまなタンパク質・脂質・核酸と非酵素的なグリケーション（糖化）反応を引き起こしてしまします。現在、このような現象は「糖化ストレス」としても理解されるようになってきました。食品科学の領域では、Maillard（メイラード）反応とも呼ばれています。メチルグリオキサールは、グルコースに比べ数万倍の反応性を有しますが、通常はglyoxalase systemにより速やかに消去されており、その鍵を握る酵素がglyoxalase 1 (Glo1) になります。様々な病態形成において、メチルグリオキサール、Glo1の関与が知られてきています。現在、研究室では、Glo1の遺伝子発現誘導のメカニズムの解明とその応用研究を行っています。

また最近では、グリケーション（糖化）反応とその最終反応産物（advanced glycation end-products, AGE）（ネーミング、その受容体応答系（Receptor for AGE, RAGE）は、糖尿病の血管合併症の発症進展、炎症性疾患、がん、動脈硬化、骨粗鬆症、精神疾患、アルツハイマー病などの神経変性疾患や、様々な老化・加齢関連疾患に関わることが明らかになってきました。当研究室では、このようなポストゲノム研究を幅広い領域で遂行し、

グリケーション研究を牽引する代表的な研究室となっています。現在、日本メイラード学会の事務局を務め、国際メイラード学会の運営にも貢献しています（写真：二〇一五年九月 東京大学伊藤国際学術研究センターで開催した第十二回国際メイラード反応シンポジウムでの集合写真）。

二、RAGE (receptor for AGE) が関わる生理機能と病態

前述のAGEを認識する細胞表面レセプターとして当初見出されたのがRAGEになります。現在、RAGEは自然免疫に関わる生物学的にも重要なパターン認識受容体として理解されています。当研究室では、これまでにマウス遺伝子改変技術駆使して、RAGEトランスジェニックマウスやノックアウトマウスを作製し、糖尿病、糖尿病合併症、肥満、がん転移、感染症、敗血症などにおけるRAGEの果たす役割を明らかにしてきました。RAGE阻害薬の開発研究も行っており、ドラッグリポジショニング可能な医薬品を複数見出しています。さらに、がん幹細胞発生の生物学的観点からの研究も行っています。子どものころの発達研究センター・東田陽博特任教授研究室との共同研究で愛情ホルモン・オキシトシンの機能にも深く関わっていることを明らかにしています。

三、国際共同研究の推進

米国ハーバード大学医学部ジョスリン糖尿病センターのSteven E. Shoelson教授研究室とは今後も慢性炎症、自然免疫、線維化、代謝などの研究を通して、人的交流を含めた形をさらに強化し、国際共同研究を推進していく予定です。

おわりに

研究の成果を通じて社会に貢献していきます。今後とも十全同窓会員の皆様のご指導ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。（山本 靖彦 記）

教室だより

金沢大学大学院先進予防医学
研究科包括的代謝学分野
金沢大学大学院医学系研究科
内分泌・代謝内科学分野

【沿革】平成二十六年三月付で金沢大学医学系に新分野として大学院先進予防医学研究科 包括的代謝学分野が創設され、教授として簗 俊成が着任しました。スタッフとして御簾博文准教授が在籍しています。旧来の大学院医学系研究科では内分泌・代謝内科学分野を兼任し、附属医院では内分泌・代謝内科の臨床を担当しています。

【教育】臨床講義やBSLではチュートリアル形式による参加型を基本としています。講義準備には時間と労力を費やしますが、科目担当として以来、学生との距離が格段に近くなったことは大きな収穫です。若手医師が、BSL学生、クリニカルクラークシップ学生、研修医に張り付いて指導していて、とても良い雰囲気です。本年は、学類四、五年生が内分泌疾患の症例報告に取り組み、二人が「日本内科学会」とはじめ「で優秀賞を受賞しました。一人がmedical research training (MRT) コースに入り、引き続き基礎・臨床研究に取り組んでいます。

【臨床】附属病院で担当する内分泌・代謝内科では、人工臓臓を用いた臓器特異的インスリン抵抗性の評価と血糖制御により、病型診断と治療に難渋する症例を対象とした高度専門医療を実践しています。また、周期、妊娠、ステロイド治療における

栄養と血糖の管理を通じて、病院全体の医療アウトカム向上に寄与しています。

金沢大学病院では、平成九年より多職種連携チーム「Team Diet」が稼働しています。教育入院カンファランス、他科糖尿病サポーターチーム、妊娠糖尿病チーム、毎日の糖尿病教室、糖尿病腎症透析予防指導チーム、フットケアチーム、糖尿病運動療法指導チームが活動しています。院内勉強会やセミナーを通じて、糖尿病療養指導士(CDE)を育成してきました。これらの経験で蓄積したメソッドをもとに、「Team Diet」の糖尿病療養メソッド(日本医事新報社)、「糖尿病チーム医療の教科書」(メディカルビュー社)などの著作や、iPadアプリ「バランス生活touch」(iPhoneアプリ)「e糖尿病連携手帳」(Publishing社)などのアプリケーション開発を通じて、国内における糖尿病チーム医療のさきがけ的役割を担ってきました。これらのチーム医療を基盤に、本年九月、金沢大学糖尿病センターを立ちあげました。

一方、内分泌疾患は、下垂体、甲状腺、副甲状腺、副腎、性腺を対象とするので、これを担う診療科は、内分泌内科、小児科、核医学科、脳神経外科、眼科、内分泌外科、耳鼻咽喉科(頭頸部外科)、泌尿器科、産婦人科、がんセンターと多岐に亘ります。すでに甲状腺腫瘍、下垂体疾患、甲状腺眼症においては、関連する診療科が定期的に集まり、症例検討会あるいは研究会を開催してきました。本年九月、診療科横断的な診療を内分泌センターとして一元化しました。内分泌疾患の質向上、内科系と外科系の共同研究を促進したく思います。両センター活動を通じて、金沢大学病院

のプレゼンス向上に寄与したく思います。

【研究】糖尿病・肥満症の病態解析、糖尿病薬のエビデンス構築に向けたユニークな臨床研究を進めています。竹下有美枝助教は、スイス・ジュネーブのWHO本部に Outreach、国際保健医療を学んできました。今後の新展開が期待されます。

近年、全身の臓器がエネルギー代謝とホルモン産生を担うことが明らかになるにつれ、内分泌学の概念と領域はますます拡大しています。私たちは糖尿病・肥満症の病態を形成する代謝経路と鍵分子を同定し、その知見に基づいて、生活習慣病に対する早期診断と先制・最適医療実現のための新しい診断・治療技術創出を目指します。さきがけ研究員を兼務する御簾博文准教授を中心に、ヘパトカインの新規作用とそれを担う受容体とメカニズム



解明を通じて、2型糖尿病の新病態を明らかにする基礎研究が進行中です。糖尿病・肥満症患者の肝臓から分泌されるセレノプロテインD (Cell Metab 2010) およびLECT2 (Diabetes 2014) を同定し、肝臓由来生理活性分子「ヘパトカイン」と総称しました。セレノプロテインPが2型糖尿病や老化で観察される、インスリン抵抗性 (Cell Metab 2010)、血管新生抵抗性 (Diabetologia 2014)、運動抵抗性 (Nat Med 2017) をはじめとする多様なシグナル抵抗性を形成することを見出しました。これらの知見は、肝臓もまた内分泌臓器であり、ヘパトカイン異常分泌を介して、糖尿病や肥満症の病態形成に深く関わっていることを示唆し、多くの研究領域に影響を与えています。

平成二十八年四月より金沢・千葉・長崎大学の三大学共同先進予防医学研究科がスタートしました。公衆衛生学教室と連携して、能登地区で前向き追跡コホート研究を進めています。詳細な栄養実態調査、脂肪肝、骨密度、体組成、インスリン抵抗性、微量元素、ヘパトカインレベルなど、通常の検診では測定しないユニークな項目を評価し、健康状態との関連を検討しています。将来的には疾病の発症に関わるゲノム背景と環境因子のクロストークを担う因子を絞り込むことで、生活習慣病に対する先制医療に資する新規診断・治療法の開発を目指します。【おわりに】新設から間もない小さなラボですが、十全同窓会に支えていただきながら、一步一步、独創的な研究と良き医師の育成に努めていく所存です。今後とも厳しくご指導いただきますよう、お願いいたします。(簗 俊成 記)

支部だより

沖縄支部

平成二十八年度金沢大学医学部十全同窓会沖縄県支部会は平成二十九年二月二十五日に那覇市の首里にあるダブルツリービヒルトン那覇首里城（旧グランドキャッスル那覇）で開催されました。沖縄県の登録会員数は五十一名で今回はそのうち二十名の先生方に御参加いただきました。最初に支部長挨拶を昭和五十七年卒業の私、知念弘が行い、そのあと乾杯の音頭を昭和五十年卒業の前支部長である上原元先生に執っていただきました。幹事からの報告を今回新会計に就任した昭和六十年卒業の浜端宏英先生にさせていただきましたが、慶弔費の規定の説明など事務的な事柄ばかりでなく、今回参加できなかった先生方からのコメントを顔写真入りのスライドで紹介して



くれたりして同門の先生方の近況を窺い知ることができました。

今回は同窓会本部からのゲストはおよびできなかったため出席した会員一人一人の自己紹介並びに学生時代の思い出を語っていただきましたが、いろいろなエピソードが飛び出し、笑いに満ちた自己アピールの時間になったかと思えます。

そのあと昭和三十一年卒業の金城國昭先生に十全同窓会沖縄支部の歴史をお話しいいただき、昭和四十六年卒業の大浦孝先生が提供された学生時代の写真やこれまでの同窓会支部会の写真を肴にいい食事とお酒を堪能することができました。思い出の写真の中には昭和五十二年、沖縄県出身者が学生課と一緒にいった送別会の写真も披露され、当時の学生課稲葉栄作部長や春木賢男係長など学生課に世話になったエピソードも披露されました。沖縄らしい貴重な写真でした。また、昭和五十一年卒業の上里博光先生に石川県のおいしい日本酒も差し入れていただきました。上里先生、ごちそうさまでした。

平成二十八年度は昭和三十一年卒業の国吉勲先生が春の叙勲として瑞宝双光章を受賞されましたので、一言受賞に際しての喜びのお言葉をいただきました。

その後参加者全員で集合写真を撮影し、しばし歓談した後全員で四高寮歌・南下軍の歌を昭和四十七年卒業で柔道部所属の知名保先生の前口上で熱唱し、閉会となりました。

閉会の辞は前会計で昭和五十三年卒業の外間政利先生にお願いしました。

今年度の沖縄県支部会は昭和三十一年卒業から平成十七年卒業の先生方が一堂に会し、多少の年齢差はあったものの非

常に和気あいあいとした雰囲気できくばらんな同窓会が行えたと考えております。次年度は本部からのご参加もお願いする予定です、その際はご協力のほどよろしくお願いいたします。

平成二十九年度十全同窓会沖縄支部会は二月二十四日の土曜日に開催する予定です。

集合写真（敬称略）

後列左から…屋良朝雄（昭和五十五年卒業）、末田善彦（平成十七年卒業）、上里博光（昭和五十一年卒業）、伊是名博之（昭和四十九年卒業）、平良博史（昭和五十一年卒業）、奥村耕一郎（平成二年卒業）

中央左から…外間政利（昭和五十三年卒業）、上原元（昭和五十年卒業）、楠憲夫（昭和四十七年卒業）、安里公（昭和四十八年卒業）、伊波久光（昭和五十三年卒業）、大城康彦（昭和四十八年卒業）、浜端宏英（昭和六十年卒業）前列左から…知名保（昭和四十七年卒業）、大浦孝（昭和四十六年卒業）、金城國昭（昭和三十一年卒業）、知念弘（昭和五十七年卒業）、国吉勲（昭和三十七年卒業）、安谷屋茂男（昭和四十六年卒業）、国吉光雄（昭和四十六年卒業）（知念 弘 記）

能登支部

新緑の候、爽やかに晴れ渡った六月十一日（日）、能登支部総会を、今回初めて能登半島の中央に位置する穴水町で開催しました。昨年度実施したアンケート調査を基に、距離感を考慮しての開催地でしたが、参加者の増加は実現しませんでした。

総会に先立ち役員会を持ち、同窓会の組織である会員の増強について提案があり、次年度から取り組むことになり、総会でも決議されました。それは、通常会員1の再確認でした。これまでは、金沢



大学医学類、金沢大学医学部医学科、金澤医科大学（旧）及びその前身校医学科並びに附属医学専門部の卒業生のみを名簿に載せていたのを、大学院医学系研究科の修了生も含むこととしたものです。また、総会では、八十歳以上の会員は、支部会費は無料と決定しました。

恒例の特別講演では、生誕地が輪島市で輪島高校出身の、十全同窓会会計担当理事でもあられる小児科主任教授の谷内江昭宏先生が、楽しく話されました。金沢大学、医学類および大学附属病院の現況について説明があり、そして、小児科領域でも少子化の流れの中で、医療機関のネットワーク形成がキーワードになっている状況を訴えられました。途中、ご自身の研究に付いても語られ、充実した時間を持つことが出来ました。最後は、楽しみにしていた懇親会でし

た。山本健新支部長が、会員の増強を図る中で、新しい役員の支援を得ながら、能登支部の活性化を目指したいという意気込みを述べられた後、乾杯の音頭をとられて開宴となりました。キャッスル真名井の、地元収穫の新鮮な魚介類や野菜などが盛り沢山のご馳走を口にしながら、和やかな宴会が進みました。途中、参加者全員が三分間スピーチを語りました。多くは六十五歳以上の定年退職者や自営業を引退した会員で、体調に合わせての適度の医療業務に携わっていることの報告が続きました。そのような流れの中、昭和四十八年卒業の八野田実会員が、人生の素晴らしい再出発を語られた時には、会場はドヨメキしました。高校卒業時の夢であった画家の道に挑む話でした。事情あって、途中医師としての人生を送ったのですが、息子さんに医院を任せて自由の身となり、本格的に絵画に取り組むとの意気込みを話されました。

楽しい一時はあっという間に過ぎ、最後は、出席者の最長老である昭和三十六年卒業の佐原吉博先生の挨拶後に、解散しました。来年の特別講演は、やはり能登半島、珠洲市出身の太田哲生先生(旧第二外科教授)にお願いすることとなっています。(村本 信吾 記)

近畿支部・滋賀支部

平成二十九年六月十一日(日) 十全同窓会近畿支部と滋賀支部総会を幹事県として彦根市で開催いたしました。

新緑の彦根城が間近に見える彦根キャッスル&スパにて十全同窓会会長の中村信一ご夫妻をお迎えいたしました。

先生には大学の近況報告をしていただき、懐かしく拝聴いたしました。

又、今回特別講演として浅井徹教授(昭和六十一年卒業)にお願いしましたところ「最高水準の心臓血管外科治療を目指して、滋賀医大における十五年の挑戦」と題してお話いただきました。



冠動脈、一弁膜症、大動脈全ての最高水準の手術を二十四時間三六五日態勢で頑張っていただいており、また超早期回復管理を全ての症例に導入しておられることをお聞きし十全同窓会員として大変頼もしく嬉しく思いました。先生から劇的に回復された患者様の笑顔が一番の喜びですとのお話を伺い、先生のところで助けていただいた小生の何人かの友人を思い浮かべ改めて感謝したいです。今後益々のご活躍を期待いたしました。

ホテルの吟味してくれた料理をいただきながら近畿各県の先生方と楽しい時間を過ごし又の再会を願って散会となりました。

当日の出席者は、奈良…西尾功(昭和三十四年卒業)、大阪…松山寛市(昭和四十二年卒業)、李利彦(昭和五十七年卒業)、橋本久仁彦(昭和六十二年卒業)、兵庫…裏辻雅章(昭和五十三年卒業)、辻香(平成十三年卒業)、京都…八田一郎(昭和三十八年卒業)、滋賀…江竜喜史(昭和三十九年卒業)、浅野定弘(昭和四十二年卒業)、三宅隆(昭和四十三年卒業)、朝日晋(昭和四十五年卒業)、安田美代子(昭和四十九年卒業)、谷徹(昭和五十一年卒業)、古西博明(昭和五十二年卒業)、榊田昌之助(昭和五十三年卒業)、伊藤誠(昭和五十四年卒業)、浅井徹(昭和六十年卒業)、三浦克之(昭和六十三年卒業)、伊藤英樹(平成八年卒業)、白石制(昭和四十一年卒業) 敬称略

(白石 制 記)

ボストン支部

平成二十九年六月二十四日、十全同窓会ボストン支部会を米国マサチューセッツ州ボストン市のチャイナタウンにある小桃園海鮮菜館(Peach Farm Restaurant)で開催しました。今回は金沢大学からハーバード大学医学部ジョスリン糖尿病病セン



ターを訪問されている山本靖彦先生(平成四年卒業・血管分子生物学教授)の日程に合わせるかたちでの開催となりました。本ボストン支部会は、ボストン在住や現在留学中の十全同窓会会員の相互の親睦を深めることは勿論のこと、将来の留学・来訪者となりうる金沢大学在学、同窓会員の方々のためのネットワーク構築あるいは強化の新拠点として機能しているものです。ボストン在住の広瀬竜夫(昭和三十六年卒業)が本支部支部長としてまとめ役の任を永年にわたり担っておりま。さらに、本十全同窓会ボストン支部を核として、医学部出身以外の広く金沢大学卒業生も含めた金沢大学同窓会ボストン支部としての役割も果たしています。現在、ハーバード大学ダナファークーガンセンターに留学中の中河秀俊先生(平成十七年卒業)、ハーバード大学ブリガム

アンドウィーミンスズ病院に留学中の篠崎康之先生(平成十七年卒業)にも参加をしていただきました。また、今回は、ジョスリン糖尿病センターで米国の糖尿病患者教育システムを視察中の保健学系・松井希代子講師、医薬保健総合研究科保健学専攻・大学院生の二人、医科学専攻・大学院生の一人、さらに医学類六年生でクリニカルクラークシップを利用しての実習で訪れている二人を加えた総勢十名の盛会となりました。

会の冒頭、私支部長からの開会の挨拶の後、中河先生の乾杯の発声で会が進行しました。訪問者側から、現在の金沢大学の状況の説明があり、ボストンに研究留学中のお二人の先生方からは、ボストンでの生活、研究状況、留学のすめなどがあり、和やかな情報交換、歓談の場となりました。そして参加者一同、ニュートン・イングリッド地方のロブスター、ソフトシェルクラブなどのシーフードを堪能しました。特に、大学院生と医学類の学生にとっては大変貴重な体験と刺激になったと思います。金沢大学医学部のこれまでの歴史と、十全同窓会員の世界での活躍とその繋がり、強さを肌で感じ、今後の歴史を引き継ぐ次代の担い手として育ってくれることを期待しています。

今回の参加者は次の方々です。写真前列左から、松井希代子(保健学系講師) 広瀬竜夫(昭和三十六年卒業・ハーバード大学医学部眼科教授・支部長)、山本靖彦(平成四年卒業・篠崎康之(平成十七年卒業)、後列左から、和田理沙(保健学専攻大学院生)、熊倉良太(保健学専攻大学院生)、河野修平(医科学専攻大学院生)、雲井洋文(医学類六年生)、中河秀俊(平成十七年卒業)、山村優果(医学類六年生)(以上敬称略)。

尚、今後、留学が決定しボストン近郊に來られるような方がもしおいでましたら支部長(Email: tatsuhirase@me.com)までご連絡をお願いいたします。最後になりましたが、ボストン支部会にご援助いただきました同窓会本部事務局に御礼申し上げますとともに、今後益々の十全同窓会のご発展を祈念いたします。

(広瀬 竜夫 記)

千葉支部

七月二十三日(日)におこなわれました、十全同窓会、千葉支部総会(納涼会)のご報告を致します。

開催場所・千葉センシティー 二十三階 東天紅

今回は、十全会本部より、十全同窓会会長の中村信一先生、茨城県医師会会長の諸岡信裕先生、十全同窓会関東地区幹事の内潟安子先生、をお迎えして開催されました。

今回、二十五名と盛会でした。生水真紀夫先生(千葉十全会会長)の開会の挨拶が始まりました。

中村先生からの「金沢大学医学部の近況」では、新しくなった最近の金沢大学医学部の外観、スーパースローバル大学の指定校の理念と実績、〇次予防医学の構想、などのお話を頂きました。

金沢大学、医学部はともがなばっているのですね。皆さんも機会をみて、是非新しくなった金沢大学医学部をたずねてみて下さい。

諸岡先生からは、「鉄ちゃん人生六十年を迎えて」の題名で、諸岡先生の人生そのものの機微を伺いました。

乾杯のご発声は、能川浩二先生です。最近体調が優れなかったようですが、今回出席頂けて本当に良かったです。

そうそう、今回は、鎌田栄先生の同級生の内潟安子先生をはじめ、千葉十全会に出席頂きました。長いお付き合いのお二人ですが、今後も末永くお付き合い下さい。

水野谷先生、今回も司会ありがとうございました。

参加者名です。(敬称略)

中村信一(昭和四十三年)、諸岡信裕(昭和四十八年)、内潟安子(昭和五十二年)、能川浩二(昭和四十年)、高柳正樹(昭和五十年)、鎌田栄(昭和五十二年)、生水真紀夫(昭和五十六年)、新井公人(昭和五十五年)、榎原直樹(昭和五十八年)、高橋敬一(昭和六十年)、相生真吾(昭和六十二年)、松本尚(昭和六十二年)



年、水野谷智(平成元年)、上田秀樹(平成二年)、古川勝規(平成二年)、佐野剛一(平成三年)、大塚祐司(平成四年)、田口達哉(平成四年)、中尾元栄(平成四年)、榎原雅裕(平成六年)、石川博士(平成七年)、橋本佐(平成十二年)、馳亮太(平成十七年)、羽生裕二(平成二十年)、秋山文秀(平成二十三年)

若い先生ももっとどんどん参加して下さい。(高橋 敬一 記)

関東地区拡大支部

平成二十四年から定番の会場となっている明治記念館において、本年も十全同窓会関東地区拡大支部合同総会が、八月五日に開催された。一昨年は大型台風、昨年は三七、三八度の酷暑で目もあけられないくらいであったが、本年は猛暑の上、高湿度で息が上ってしまう天候で、年々、日本の夏がどうなるのか、三年後の東京オリンピック開催がどうなるのかと、だれもが危ぶんだ日であった。

さて、本年の同会には、酷暑の中、四十七名の会員が参加した。うち、昨年三月卒業の若い会員が一名参加された。うれしいことである。さらにうれしいことは、本年から正式に、十全同窓会茨城県支部がジョイントされたことである。十全同窓会茨城県支部長は諸岡信裕先生(茨城県医師会会長)で、六月三日に開催した本会世話人会からご出席いただいた。

ここで、本会世話人会のメンバーを記載しておく。神奈川県支部長島利夫先生、埼玉県支部長瀬戸幹人先生、副支部長久慈一英先生、千葉県支部長生水真樹夫先生、副支部長高橋敬一先生、東京支部長内潟安子、副支部長林同文、三浦順之助に加え、幹事として、重鎮の平松慶博先生、

田上恵先生、井田雅祥先生である。本年の講演いただく先生を、千葉県支部長生水真樹夫先生に満場一致で決定した。

神奈川県支部長島先生に開会のご挨拶をいただき、茨城県支部長諸岡先生に乾杯のご発声をいただき、会は進行した。暑いため、脱水を予防して、まずはのどを潤して、講演を拝聴することとした。

中村信一十全同窓会会長の本部からの近況報告は、卒業式や学位記伝達式において十全同窓会の位置づけが重くなったこと、本年の国家試験合格率、卒業後の進路のこと、大学運営体制、特に世界最高水準の教育研究拠点型の大学の機能強化を中心とした第三期中期計画目標、さらに先進予防医学研究科学生受け入れ開始、プロムナード完成、WHOコラボレーティングセンターの式典、研究域の主な出来事や、金沢大学で推進されている国家的事業、スパー予防医学に関する三大学共同大学院の設置、超然プロジェクト、先魁プロジェクト、そして、宝キヤンパスのこと、外国人留学生がどんどん増加していること、オランダに共同して拠点をつくったことなどが紹介された。近未来の金沢大学医学部に大きなわくわくした目標があることが全員に伝わったと思う。

中村信一会長の近況報告の後には、本年は、昭和五十六年卒業の千葉大学医学部産婦人科教授生水真樹夫先生のご講演であった。タイトルは、「周産期医療の現状について」。

日本の周産期死亡率は世界に冠たる低値である。産婦人科、新生児科の医師の努力の賜物である。しかし、大きな医療事故が新聞沙汰になったのは産婦人科領



ことをお示しになった。医療の進歩の意を今一度振り返ったものである。

懇親会では、卒業年度順に、全員から近況を報告いただいた。神奈川県支部長は島先生から若杉春枝先生に引き継がれることが披露された。

最後に、埼玉支部長瀬戸先生のギターに合わせて、四校寮歌を斉唱し、平松慶博先生の閉会のご挨拶をいただき、散会となった。

来年も、八月第一土曜日、明治記念館、午後五時からである。是非、多くの会員に、参集をお願いしたい。

(東京支部長 内潟 安子 記)

愛知県支部

平成二十九年六月十七日(土)名古屋駅近くの名鉄ニューグランドホテルにて、第三十一回十全同窓会愛知県支部総会が開催されました。

今回は、五年に一度の第二回金沢大学東海地区合同同窓会と同時開催となり、十全同窓会の岐阜支部、三重支部の先生方にもご臨席頂きました。

昨年度、中村正夫先生(昭和四十四年卒業、吉田均先生(昭和五十年卒業)がご逝去され一同で黙とうをささげました。岐阜支部、三重支部の先生方の挨拶を拝聴しました。

愛知の支部長が、吉尾先生から水上先生へ交代することが決まりました。新副支部長は篠田先生に決まりました。

十全同窓会の後に、東海地区合同同窓会が開催されました。金沢工業会東海支部百五名、薬学部十九名、法経文学部五十四名、理学部十名、保健学類一名、

十全同窓会二十八名の参加に加え、大学本部、金沢工業会、法経文学部同窓会のご来賓がご臨席され盛会となりました。記念講演会は「挑戦と改革で飛躍する金沢大学」と題して山崎光悦学長が講演されました。独立法人化以来大学運営は大変と聞き及んでいましたが、少子化やグローバル化の中で個々の大学の役割や存在価値が問われていると感じました。我々卒業生一人ひとりが大学の評価を



担っているという思いとともに、その総和としてのこれからの母校の発展や新たな歴史が期待されました。私も微力ながら母校を支援していきたいと思いました。乾杯、歓談の後に校歌、寮歌「北の都」を斉唱して閉会となりました。

参加者（敬称略、卒業年）…

【岐阜支部】大西弘生（昭和五十一年）、渡辺幸夫（昭和五十六年）、【三重支部】原田資（昭和四十六年）、祖父江直久（昭和五十一年）、【愛知支部】横田徳久（昭和三十五年）、臼井明生（昭和三十六年）、大原教知可（昭和三十七年）、中村暁（昭和三十八年）、三輪忠人（昭和四十二年）、尾山淳、山内雅博（昭和四十三年）、野垣英逸（昭和四十四年）、吉尾豪（昭和四十五年）、大原清仁（昭和四十六年）、水上哲秀（昭和四十七年）、篠田雅幸（昭和五十一年）、伊藤真理、坪内明典（昭和五十二年）、荒尾元博、荒尾はるみ（昭和五十七年）、高味良行（平成元年）、宇野雄祐、高見昭良（平成三年）、岩瀬克敏（平成五年）、西脇太記朗（平成七年）、近藤俊樹（平成八年）、金子佳史（平成十一年）、田中順子（平成十五年）

（岩瀬 克敏 記）

クラス会

三九会

平成二十九年五月十三日、和倉温泉加賀屋にて開催されました。

総勢二十二名の参加者、全員、定刻どおりに、集まり、記念撮影の後、開宴しました。まず、この一年間に亡くなられた笹井三郎様に黙祷をしました。その後、一番遠くより、はるばる来られました中島良明君の発声により、乾杯の後、マイクをまわして全員がテーブルスピーチを行い、お互いの健康や近況を話合いました。



加賀屋の特別サービスでギターに合わせて、メキシコの歌と演奏をして頂きましたが、堀川君の飛び入りのダンスや宮城君のベサメ・ムーチョのカラオケで、盛り上がりました。来年は米倉君が岐阜でして下さるとのこと、挨拶がありました。卒業後、ほぼ毎年、会を開いていますが、全員、後期高齢者で八十歳近くになり、いつまで、開けるだろうか。

（参加者）稲坂暢、江竜喜史、堀川利彦、米倉幸人、野垣俊幸、岩泉九二夫、小林宣泰、三輪晃一、馬淵宏、川上義孝、中島良明夫妻、宮城徹三郎夫妻、武内徹夫妻、岩佐嘉郎夫妻、安積宏明夫妻、藤村和昌、荒井邦夫

（荒井 邦夫 記）

同窓生の消息

第五十九回 全日本病院学会 in 石川 開催報告

社会医療法人財団董仙会恵寿総合病院理事長

神野 正博（昭和六十一年大学院修了）

開会式オープニングとして昨年十一月にユネスコ世界無形文化遺産に指定された日本最大の曳山、七尾青柏祭のデカ山の町衆による木遣り唄から始まった第五十九回全日本病院学会in石川。地方の祭の賑わいと伝統・文化こそ、地方活性化の源であり地方創生の種であるというメッセージを發しました。そして、その地方になくてはならないものはセフティネットとしての医療であると訴えました。

行政官、研究者、経済人、起業家さらには影響力の大きい政治家が集い、特別講演3、教育講演4、市民公開特別シンポジウム、シンポジウム6、パネルディスカッション13、ランチョンセミナー21、応募演題七百十を通して大いに盛り上がる事ができました。

晴天に恵まれた九月九～十日に石川県立音楽堂をメイン会場に十四会場で、全国から約三千三百名が集って、病院に関する学会が開かれました。二〇一八年春に迫る診療報酬・介護保険報酬ダブル改定、第七次地域医療計画策定を含む数々の目の前の改革への対応から、中長期的に社会の変化や価値観の変化にいかに対応するか、あるいは進化するICTをいかに利用するかなどを、

大変革前夜に挑め！

「今こそ生きるをデザインせよ」というテーマで議論することとしました。まさに、ここでの「生きる」にはこれまで病院が専ら担ってきた入院医療ばかりでなく、住民の生活の場や人生にかかわらねばならないという思いを込めてプログラムを組みました。病院関係者はもとより、



十全昔話

ドミニカ共和国を訪れて

竹下 正純 (昭和三十三年卒業)

ドミニカ共和国(以下ドミニカと略す)へ行ってくれないかと依頼されたのは平成九年大分医科大学を定年退職した前後の頃であった。その頃糸賀敬学長が中心となって海外の様々な国との連携を図ろうとしていた、その結果の一つとしてドミニカにおいて腸疾患で亡くなる小児が多いことからドミニカのルイス・アイバル国立病院に小児腸疾患研究所を設立して、これが大きな成果を上げ、土地の人々からガストロと呼ばれて親しまれてきており、さらなる援助を求めてきていた。これには国内の貧富格差及び医療従事者の公衆衛生知識の欠如、さらに画像診断分野は、私的病院が結束してMRIやCTを設置し、高度な診断機能を發揮しているのに対して、公的病院が十分な画像診断設備及び技術を有していないため、多くの国民のニーズに対応できない状態にある。アイバル複合病院レジデント医師教育課程に疫学を導入し、現在問題となっている Dengue 熱、マラリア、赤痢、アメーバ症、結核その他疫学上の問題に対する対応力を養う。

このようにして平成十一年十一月末私は明応二年コンブスが探検し、総督府を置いたイスパニオラ島にプロジェクトリーダーとして入りました。同伴はメキシコに長かったという日本国際協力センター海外派遣要員小林郁男氏。

イスパニオラ島の西側はフランス領のハイチ共和国、北と東は大西洋、春には鯨



(1) 新設なったドミニカ・日本有効医学教育センター入り口ドミニカ共和国旗・日の丸が青空のもとひるがえっている。

がやってくる。海外青年協力隊の面々がウオッチングを楽しんでいる。南はカリブ海、プライベートビーチが全島の至る所にあつて一年中海水浴ができるので北米、ヨーロッパ、南米などから年中観光客が訪れる。ただし秋には北米南海岸に向かう猛烈な台風が通過するので油断できない。 Dengue 熱はネッタイシマカやヒトスジシマカによって媒介される Dengue ウイルスの感染症である。この蚊は植物の葉などで少しでも水が貯まればボウフラを沸かせるので、初めは風邪かな、と思つてみると、その後もものすごく消耗する、小児や赤子では出血傾向を示して悪化し死亡する例があるので油断できない、成人ではその後次第に回復する。ここでは統計上毎年多数の患者が発生しており、まず、これにはまだ抗体が見つかっておらず、この研究に大分医大感染予防江下優樹助教が間もなく蚊取りのたも網を持って参加して来ました。

赤痢アメーバは日本ではまずお目にかかることが少ないがドミニカでは飲料を飲むと時として入ってくる・ジュースなどを振舞われた時が危ない。飲み水などは絶対ボトル入の清水でなくてはならない。

結核は検査で、かなり広がっており、



(2) サミー・ソーサ (左から2番目) を囲んで。

小児麻痺は予防の生ワクチンで麻痺患者が数例発生して時の厚生大臣が頭をかかえる場面に遭遇したこともあり、日本は世界で一番安全な国だと言われているが、ドミニカは泥棒が多い。少し大きな屋敷の前には大抵番人がいて小さな銃を抱えている、毎朝前を通るので慣れてしまい、「おはよう」といって言葉を交わすこともあるようになってしまった。私が泊まっていた所もコンドミニオンと言って高い塀で囲まれており、中にビルが五、六棟あつて、入り口には番人が居て見張っている。

早くから建設を急いでいた、東京都(株)山下設計、国際プロジェクト部の林家昌太郎氏設計のドミニカ共和国・日本友好医療教育センターが完成し(1)、フエルナンド大統領、赤澤正人大使出席のもと、引き渡し式が行われた。一階画像診断施設、MRI、CT、マンモグラフィなど次々と入った。二階公衆衛生等講義室、Dengue 熱の抗体調査、遺伝子増幅法 (PCR) 装置などが入った。

平成十三年七月二十七日教育の基本理念の策定がなされ、本センターはドミニカ

全国における医療従事者の卒後教育制度の確立を目標に、画像診断及び予防医学としての疫学を中心とする公衆衛生学を教授・研究し、国民の健康の維持増進と福



(4) ドウアルテ・サンチェス・メジャ賞コメンダール位

ドウアルテ・サンチェス・メジャ賞コメンダール位(4)が授賞されました。

最近二十年超医療分野を支援して来た大分大学医学部放射線講座、森宣教授にドミニカから(3)最高榮譽賞の建国の祖、



(3) ルイス・エドワール・アイバル保健都市 (アイバル病院の名称変更) 関係者の皆さんと。森教授 (最前列中央) メジャ賞を示している。

転んだ方がベスト 信は万物の基礎をなす

医学類四年 田中 智

十全同窓会の皆様、はじめまして。医学類四年の田中智と申します。今夏は長雨冷夏でありましたが、この十全同窓会報が皆様のお手元に届く頃には大分過ぎやすい気候になっていると思います。どうか皆様お体に気をつけてお過ごし下さい。

現在私は医学類四年で、臨床医学の講義を受けております。今回十全同窓会会報に執筆する機会を与えて頂いたことを恐縮する反面、これまでの学生生活を振り返り、自身の考えをまとめ、今後に向けて気を新たにする良い機会を頂いたとも感じております。駄文ではございますが、楽しんで頂けましたら幸いです。

私が医学部に行き医師になろうと決めたのは他大学の薬学部在籍していた時でした。私はそれまで薬学部で基礎的な有機化学と生命科学を学んでいたのですが、そのうち人体の全身の構造や機能をより勉強したいと思ったこと、またその知識を活かして実際の患者さんを治療して役に立ちたいと思ったこと、さらに自分の薬学部での基礎研究のノウハウと医学部で得た臨床的な知見を活かしつつ研究に従事したいと思ったことから、医学部の受験を決意しました。

こう書くとうるさしく、もちろん決して嘘ではないのですが、実はこれが自分を動かした決定的な要因ではないと感じています。恥ずかしいほどに漠然としていることですが、「このまま流れに乗って薬学部の大学院に進んでも自分の為にならないと感じる」「自分が医学部に行く、

医者になるということは自分の中でしっかりとくる、合点が行く」といったところだと記憶しています。今から思えば、自分の決断は、様々な選択肢を吟味して冷静な判断のもと下したものではありませんでした。結局のところ、「〜という理由で医師になりたい」というよりも、「医師になるのが自分の中で納得がいくから医師になりたい」という域を出ないもののように感じます。それでも、自分の選択を今まで後悔したことは全くなく、金沢での様々な出会いや経験をすることにつれ、本当にここに来てよかったと感じています。また、自分の決断が本当に意味のあるものであったと言えるように、今後ますます頑張らなければと思っています。

ここで少々長めですが、東京大学工学部の藤田誠先生の文章を紹介させていただきます。これは金沢大学に入学後、ふとしたきっかけで見つけた文章であり、あらゆる局面での自分の選択を支えてくれているものです。

「学生に良く話をしますが、進路や職業は誰しもが自分で選択する(した)ものと錯覚します。しかし、実際にはそうではなく、例えそう思っても、実はそこに至るまでいろいろな人の影響を受けたり、環境によって振り分けられたりと、外的要因に大きく左右されます。人生は自分で選べる幅は広いようで意外と狭く、それ以外の要因でもっとダイナミックに揺さぶられています。そんな中で重要なことは、たえず「転んだ方がベスト」と思えること。この信条さえあれば、自分がどの道に転ぼうと、最後は「自分の選んだ道は正しかった」と思えるようになります。」(第二十回「転んだ方がベストと思える人生を」藤田誠教授 Chem-station. <https://www.chem-station.com/>)

interviews/2013/04/20-1.html)

私はこの文章を読んで、気が楽になりました。私は再受験をしたということ、高校や前の大学の同期の多くは既に自分の道を決めて社会に出ています。時たまそんな同期と呑気に学生をやっている自分を比較し、自分の選択に対し引け目を感じてしまうことがあります。そんな時にこの文を思い出すと、いい意味で過去も未来も考えず、自分の今の環境でベストを尽くすことに集中できます。

さて、話題を変えて、私の学生生活について少し話させて頂きます。私は金沢大学フィルハーモニー管弦楽団というオーケストラのサークルでヴァイオリンを弾き、昨年度私はコンサートマスターというオーケストラの演奏をとりまとめる役を務めさせて頂きました。少々説明の難しい役職ですが、大雑把にはヴァイオリンの一番前で弾いている人のことで、ヴァイオリンパートを中心に演奏面でのリーダーでありました。私がそこで何よりも大切だと感じたことは、「信は万物の基をなす」という言葉です。これはヤクルト・阪神・楽天の監督を務められた野村克也さんの著書で読んだものであり、野村さんは以下のように続けています。

「人を『生かす』・『育てる』・『使う』ことは全て『信』が基になっている。『信』とは『信頼』・『信用』・『自信』であり、『信』は人間の基になる。人間は『信』なくして何事も始まらないのである。」

その「信」をつくるものは多岐に渡ると感じました。まずはもちろん、曲や楽器について勉強して練習し、パート練習や全体練習で自分の技術や言葉で指し示すということです。これも野村さんの言葉で「組織はリーダーの力量以上には成長しない」というものがあります。面白

いことに、自分が上手に弾いて説明できるところや自分が心から理解しているところは皆上手に弾けるようになり、そうでないところはいくら尤もらしい言葉を重ねてもなかなか上達しないのです！

次に、時間を守ることの大切さです。遅刻しないということはもちろん、練習の終了時間を守ることも重要だと感じました。時間を守ることは他人を尊重することです。勉強や研究やアルバイトなど忙しいなかで、パート員と一緒に音楽をする時間を作ってくれている、こう考えることで自分も限られた練習時間を密度の濃いものにする意識が強くなりました。

そして、自分が信頼されるというだけでなく、自分が他人を信頼すること。各人に適した役割を与え、各人が組織の中で必要とされていると実感してもらうことで、水を得た魚のようにいきいきとすることが多々ありました。

サークル活動の中で感じたこれらのことは、今後医師になり、職場での関係や患者さんとの関係を築くうえでも大切なことだと思っています。今まで経験したことやこれから経験していくことを将来活かしていきたいと強く思いました。長くなりましたが、このようにして私はややイレギュラーなタイミングで縁あつて金沢でお世話になり、ここでは書ききれない様々な経験をさせて頂いております。もう少し学生の身分で様々なことを学ばせて頂き、将来これをお読み下さっている皆様と働かせて頂く際の糧としたいと思っています。こうした環境を与えてくれていた両親をはじめとした周囲の方々に感謝しつつ、充実した楽しい生活を過ごして参ります。

オープンキャンパス (キャンパスビジット二〇一七)

医学類では本年八月八日(火曜日)に、入学希望者(高校二年生以上)に医学類キャンパスを開放・公開しキャンパス内を見学してもらおうオープンキャンパス(本年よりキャンパスビジットと名称変更しています)を開催しました。当日は、あいにく台風の接近により朝から強い風雨に見舞われましたが、会場の十全講堂には、二百五十名の参加者がありました。



午前、午後の二部制として、市村宏教育委員長による「医学を学ぶ」、河崎洋志学生支援委員長による「医学生のカンパスライフ」、篁俊成教授・華山力成教授によるそれぞれ「運動療法のサイエンス」、「自己炎症性疾患の発症機序とエクスソームの役割」と題した模擬講義・研究紹介、教員・在学生との懇談会(参加教員・山本靖彦教授、藤永由佳子教授、田嶋敦教授、原田憲一教授、村松正道教授)などのプログラムで医学類の紹介を行いました。懇談会では、参加高校生からの自由質問に教員、在学生から答えてもらい、金沢大学医学類の雰囲気を実感していただけたことと思います。

金沢大学のオープンキャンパスは、昨年まで医学類を含む全十六学類においてまる二日にわたって開催されましたが、本年度からはオープンキャンパスは一日に短縮し、その代わり他の関連行事を開催することに変更となりました。高校生にとっては、オープンキャンパスとは「百聞は一見に如ず」の言葉の通り、大学の実際の姿を自らの目で確かめ大学の雰囲気を感じることから、例年多くの参加者を迎え金沢大学への関心を深めてもらうよい機会になっています。

(医学類長 多久和 陽 記)

医学展二〇一七

昨年に引き続き今年度も医学展を開催することが決定いたしました。十月二十八、二十九日の土日の二日間で開催いたします。二〇一七年度医学展開催に向けて同窓会の皆様方にはご支援ご協力を賜り、医学展実行委員一同深く御礼申し上げます。

金沢大学医学展の歴史は古く、今を遡ること六十六年、一九五二年に始まります。当初は四年ごとに開催されておりましたが、その開催の難しさからしばらく途絶えた時期もありました。しかし、二〇〇六年に再開してからは毎年開催しており、昨年度は二日間で三五〇〇人もの方に楽しんでいただくことができました。

医学展は私たち学生にとって、日々進歩し続ける医学・医療を地域の方々へ発信し医学を身近に感じてもらう場であり、また発信を通じて医学の理解を深めることができる場でもあります。このような貴重な学びの場である医学展を今年度も開催させていただけることに感謝し、先輩たちが築き上げた伝統と誇りを胸に誠心誠意取り組みさせていただきます。

今年度の医学展では「LIVE」子供達に夢を「」をテーマとしました。この「LIVE」というテーマには「医学展が地域の方々への生活(LIFE)」に身近なものでありたい、「ライブのように、お客さんである地域の方々と一緒に一体となり楽しみたい」という思いが込められています。私は入学してから毎年医学展に

参加しており、そこで感じたのは地域の方々との距離の近さです。毎年来てくださる方が沢山いて、「今年の企画よかったね」「みんな頑張っているね、楽しかったです」など多くの感想を頂きました。先輩方が築いた地域との密着性は医学展の財産であり大切にしていきたいと思い、今年度は地域との関係性に重点を置いたテーマとしました。また、毎年沢山の子供達に楽しんでいただけており、子供達が将来の夢を考えるきっかけになれたらという思いから副題として「子供達に夢を」とさせていただきます。

例年、老若男女問わず楽しめる企画を作りたいと試行錯誤しておりますが、今年度は参加型の企画を増やすことでより楽しんでいただけるものと思います。新企画としては、「産婦人科ブースとコウノドリ(講談社)のコラボ企画」「ダビュンチの展示」を予定しています。皆さんの期待を超えられるよう鋭意努力しますので、ぜひ足を運んでいただけたら幸いです。

全国でも医学展という学園祭がある大学はごくわずかであります。このような恵まれた機会に感謝し、学生一同力を合わせて全力で楽しみ、勉強させていただきます。日頃からのご支援、ご鞭撻に感謝して挨拶とさせていただきます。

(金沢大学医学展二〇一七実行委員長

石林 健一 記)

後輩の皆さんへ

毛塚 大 (平成二十七年卒業)

「夏休み、ちょっとだけ実験してみないか？」部活動にも入らず暇を持て余していた二年生の私は、この声掛けに「そのかさね」神経解剖学教室へ通い始めました。「夏休み」「ちょっとだけ」という口約束を堀先生も私もすっかり忘れてからはや数年。抄読会に出れば「なにがわからないかわからない」という「迷言」を残し、実験をすれば想像を超えたミスを繰り返したあげく「爆発とか起こさないだけでしょ」というありがたい言葉を頂戴したこともありまた。そんな日々が懐かしく思います。自分のテーマを頂戴して以来、一貫して「海馬の神経細胞死と小脳体関連転写因子の関係性」について研究の真似事をしてまいりました。(※1)

研究をしてみたいという学生から質問を受ける機会がありました。「自分は研究に向いているのか」というもので、私にとってもいまだに(今後も?)答えが出ない問いです。「こっちが聞きたいわ」と言いたいところでしたが、ぐっとこらえて「とりあえずやってみればいいよ」と答えました。無責任に言ったつもりはありません。むしろ、諸先生方も同じように答えられるのではないのでしょうか。部活動やアルバイトとは違い、研究室に所属するということは学部生にとって高尚なこともかもしれません。しかし、悩んでいるくらいなら「とりあえず」やってみるということはあながち的外れでもないのでは、

と思います。楽しいと思えば思う存分実験をしましょう。逆にもし合わないと思えば、すぐ辞めてしまってもいいと思います。まずはその「やる」か「やらない」かを決めるため「とりあえず」研究室へ行ってみる、というのはいかがでしょうか。

私は平成二十七年に金沢大学を卒業し、現在は出身地である宮城県内の公立病院にて臨床研修医として勤務しております。先にあげた文章は私が六年次在学中に寄稿した「プロフェッサーのヒヨコたち(※2)」の内容に加筆修正したものです。本学OBの先生(元附属病院長とお聞きしております)がこの拙文をご覧になったとことで、本会報編集長の絹谷先生を通じて「後輩へのメッセージ」と分不相応なご依頼を賜りました。

分子遺伝学の村松正道先生の「運鈍根と6C(※3)」や、大阪大学の仲野徹先生のブログ(※4)を拝読した身としては、それらを読んでもらえば十分と思うのですが、せっかくだいだいた機会です。ので、自戒も込めた下記の二点をお伝えします。ご期待に添えるものではないかと思ひます。諸先輩方におかれましては、御笑覧いただければ幸いです。

一点目は、勉強、医学知識の重要性についてです。低学年のうちには余裕のあった成績も研究生生活が進むにつれて徐々に低下し、卒業試験は狙いすましたかのよ

うに六〇・〇%、国家試験も優秀とは程遠い成績でした。結果、臨床に出て自分の無知さを嘆くことになりました。元附属病院長の河崎一夫先生は、新聞のコラム(※5)で「医師には知らざるは許されない。医師になることは、身震いするほど怖いことだ。」と述べられております。もし前述の元病院長先生が河崎先生であつたならば、私はご期待を見事に裏切る罪人であり、心よりお詫び申し上げます。もちろん基礎医学へ進むとしても、医学知識は不可欠です。ご子息の河崎洋志先生は、ご自身がドバミン産生神経細胞の分化誘導方法を発見した際「理学部出身者はその重要性を理解できていなかった」とおっしゃっていました。医学部出身者の優位性は「人体を知っている」というただ一点にあります。後輩の皆さんは、医学が将来の仕事に直結する学問であり、数年後には人の命を与える重責を担うことを再認識せねばなりません。

二点目は、積極性です。在学中は、研究に関して本当に好きかってやらせていただきます。夜中や土日でも当然のように実験し、なぜか講義の時間に実験室にいてもとがめられることもなく、医学展や抄読会の名の下に他教室へも頻繁に足を運ばせていただきました。学内の研究発表会であるリトリートは、ポスター発表や懇談会まで含めて学会さながらの成功を収め、また研究室参加希望の学生を対象として開催したラボツアーは、今では講義の一部となっているようです。

臨床志望の皆さんも、興味のある科のコンファレンスに参加し、診療の見学補助を繰り返せば、卒業後すぐに即戦力になれるのではないのでしょうか。法医学の塚

先生より「学生の興味本位は最高の大義名分です」というなんとも素敵な言葉をいただいたことがあります。気概あふれる学生たちを、諸先輩方はきつと歓迎してくれそうです。

医学の勉強を十二分にしたらうで、将来を見据えて積極果敢に学生生活を送ってほしい。月並みながら、在学時代の自分自身にも伝えたい言葉です。

なお、末筆に私事を書かせていただくと、臨床研修修了後はかねてからの希望通り大学院へ進学することに決め、所属先は東北大学大学院免疫学教室を選択いたしました。私が、基礎医学の厳しい世界の中で生きていくのかははなはだ疑問ですが、恩師である堀先生がふとおっしゃった一言を心の支えに、地道に進んでいきたいと思ひます。

「ずっとやっていければ、なにか出るから。」

(※6) * * * * *

(※1) Deletion of *Atf6a* enhances kainate-induced neuronal death in mice. Kozuka D et al. *Neurochem Int.* 2016 Jan;92:67-74

(※2) 「プロフェッサーのヒヨコたち」国立大学医学部部長会議 研究医への第一歩 <http://www.chnmsj.jp/kenkyuu/backnumber.html>

(※3) 「成功の条件」運鈍根と6C 金沢大学十全医学雑誌123(1):1-1 <http://dspace.lib.kanazawa-u.ac.jp/dspace/bitstream/2297/3760/1/AN00044397-123-1-1.pdf>

(※4) 「君は考えたことがあるだろうか」M D 研究者の育成について http://www.fbs.osaka-u.ac.jp/labs/nakano/essay_028.html

(※5) 「医学を選んだ君に問う」朝日新聞「私の視点」二〇一二年四月十六日号 <http://www.f-take.com/kindai-kawasaki.htm>

(※6) ご本人は全く覚えておらず、ましてや座右の銘などでは決していないとのこと。

第十一回金沢大学ホームカミングデイ開催

今回で十一回目となる、「金沢大学ホームカミングデイ」を十月二十八日(土)に開催いたします。今年も、午前中にキャンパス見学会を計画しました。

金沢大学ホームカミングデイ当日は、角間キャンパスにて「第五十四回金大祭」(十月二十八日(土)・十月二十九日(日))の開催期間中であり、さらに「ふれてサイエンス&てくてくテクノロジー」、宝町地区では「医学展二〇一七」が開催され、各種催しや展示等を自由にご覧いただけます。また、金沢城公園では写真展「よみがえる城内キャンパス」を開催しております。



イエンス&てくてくテクノロジー」、宝町地区では「医学展二〇一七」が開催され、各種催しや展示等を自由にご覧いただけます。また、金沢城公園では写真展「よみがえる城内キャンパス」を開催しております。

Marc Feldmann 博士の特別講義のお知らせ

来る十一月二日十五時より一時間半の予定で、Marc Feldmann博士(英国Oxford大学・Kennedyリウマチ研究所・教授)による、以下のタイトルの特別講義を、十全講堂で開催する予定です。

The genesis of the antibody revolution in therapeutics: anti-TNF therapy suggests how we can cure rheumatoid arthritis

病勢のコントロールが従来の関節リウマチの治療の主眼でありましたが、抗腫瘍壊死因子(TNF)α抗体に代表される生物製剤の登場によって、完治・寛解が治療目的へと現在移り変わりつつあることは会員の皆様ご存知のことと存じます。抗TNFα療法は、このように関節リウマチ治療にパラダイムシフトを起こしたのみならず、さらにはクローン

病を始めとする従来難治性であった多くの炎症性疾患の治療薬として、多大な治療効果を示しつつあります。

Feldmann博士は、関節リウマチ治療への抗TNFα療法の応用の可能性を一九九〇年代の初頭にいち早く提唱されるところに、その臨床応用にも多大な貢献をされてきました。その功績は高く評価され、二〇〇三年にラスカー賞、二〇一四年にはガードナー国際賞を受賞されるとともに、英国政府からはナイトの称号を与えられており、ノーベル生理学・医学賞の有力な候補者の一人と目されています。

このように国際的にも著名なMarc Feldmann博士が、本年十月二十九日から十一月二日の日程で、本会会員の松島綱治東大教授が金沢で主催される、第五

キャンパスの紅葉をお楽しみいただきながら、お気軽にご参加いただけるよう、企画しております。

ご家族や同期生、サークル仲間のみならず、一緒に、紅葉の金沢へどうぞお越しください。学友支援室ホームページに、開催情報を掲載しています。

◎参加費…無料

◎申込み締切…十月五日(木)

◎申込み・プログラム等の詳細は左記へお尋ねください。

【金沢大学学友支援室】

TEL 〇七六―二六四―五〇八一

FAX 〇七六―二三四―四〇三三

メール gakyu@adm.kanazawa-u.ac.jp

(学友支援室長 村田 記 記)

回国際サイトカイン・インターフェロン学会での特別講演のために、この秋に金沢に来訪されることになりました。母校の学部生・大学院生・若手医師に対して医学研究の醍醐味を伝えていただきたいという、Feldmann博士と長年にわたりご親交の深い松島教授からの要望を、Feldmann博士がご快諾いただき、国際サイトカイン・インターフェロン学会終了直後に十全講堂にて今回の特別講演を開催する運びとなりました。

本特別講演においては、抗TNFα治療法について、過去三十年近くにわたるFeldmann博士ご自身の経験を踏まえて、学部生を含めた若い医学徒を主な対象として、講義をして頂ける事になっています。国際的にも著名な医学研究者の聲に接する、またとない機会になるのではないかと考えております。万障お繰り合わせの上、多くの皆様方にご来聴いただければ幸いです。(向田 直史 記)

編集後記

大島徹前編集委員長から編集委員長の任を引き継がせていただいたから、いつの間にかはや三年が経過しました。この間、多くの先生方からいただいたご寄稿に支えられました。いただいた硬軟多彩な記事のおかげで、多くの同窓会員から充実している、読み応えがあつてうれしい等々のお褒めの言葉が事務局の山岸さんの元に届けられていたことを耳にはないものの、編集長冥利に尽きる思いがします。一方で、校正確認もれから、いささか妥当性に欠け記載が残ったまま出版されたことも多々あり、冷や汗を流しつつ、その都度心持を新たにしています。

委員長就任後に始めて書かせていただいたこの編集後記(第一五八号)の中で、新卒業生の同窓会入会率が低くなっていることと、その解消の一助となるような紙面作りをしたいという趣旨のことを書かせていただきました。孤島で頑張っておられる研修医の先生に記事をいただいた後輩の啓発を試みたり、学類生のコーナーで学生諸君に書いていただいたりと模索しているものの、いまだ道遠です。さて、昨今の若い人たちは、同窓会入会を勧められると、どんなメリットがあるのですか?と問いかけてきます。私の同年代の方と話をすると、若い頃には同級生や同窓会の繋がりのありがたさはわからなかったが、年取るとわかるんだよなあ、と返ってきます。しかし、若い人たちに、これを情で訴えてもまず反応してくれないだろうなと思います。

医学類には医王保護者の会というものがあつた。この会の会報を眺めると、会の趣旨からいつて当たり前と言えは当たり前なのですが、学生達が多くの記事を書いていることがわかります。そして、同窓会報を、現状以上にこのような参加型の紙面にすることによって、一層興味深いものになると同時に、若い世代が加わってくれることに繋がらないかなあと思案します。そのためには、現状の硬派な紙面作りから、すこし柔らかな紙面作りにするなど改革が必要であるかしれません。伝統は伝統として重んじつつも、変化する時期に来ていることと考えます。(編集委員 絹谷 清剛 記)